

Q.0 バスカルについて：人間に関わることがらを対象とするに適切ではない，純正科学（抽象的科学）とありますが，外界の事物が抽象的ということですか？直観的には人間に関わることがらの方がよほど抽象的な気がするのですが。

Q.0' バスカルの純正科学（抽象的科学）というものが，どういうものかあまりよくわかりませんでした。

A.0 よい質問です。日本語訳だけ読んでいては，フランス語の意味がわからない，という事例だと思えます。質問者が理解している「抽象的」の「抽象」の意味と，バスカルが使っている「抽象」の意味が違っているのでしょう。バスカルのいう「純正科学（抽象的科学）」は，物理学や数学や幾何学や化学などのことです（もっとも，「純正」という訳語は，日本のバスカル学者の訳し方に従ったままで，私がこれがよいと思って訳しているわけではありませんので，括弧をつけて（抽象的科学）と補っているのです）。「純正科学（抽象的科学）」と訳されているsciences abstraitesのabstraiteが，「抽象的」ということですが，この場合の「抽象」は，「何か全体としてひとかたまりとしてあるものから，一部分だけを引き出して注目して，他の部分は無視する」という意味で，簡単に言えば「引き出す」ということです。つまり，外界の事物には，人間の感覚知覚や認識の能力で捉えられる部分と捉えることができない部分があるかもしれないけれども（それがあらかどうかは立場によって異なる），例えば，時間や，空間などで限定して捉えられる三次元空間内で，一定の広がりをもつ物体としてのみ，捉える，ということが「抽象する」という意味なのです。それは，同時に，それ以外の観点を「捨象する（切り捨てる）」ということでもあります。物理学や幾何学が考察の対象にするのは，そういう意味で「抽象された対象」なのです。このような対象を，おそらく，質問者は，逆に「具体的な」対象だということでしょうね。この箇所をバスカルの意図通りに理解するためには，仏和辞典を引いて訳語を探すだけでは，おそらくだめで，例えば，中世の，トマス・アクィナスやオッカムなどが区別して考察している「抽象(abstr actio)」ということについての哲学史的知識が要求されるところです。

Q.1 「哲学史の本」の話をされましたが，いわゆる“良心的な”哲学史の本とは，例えば，
30 どういうものがありますか。

A.1 授業の中で少しずつ紹介しますので，あせらないでください。今，思いつくのは，著作として意図されたものではないのですが，九鬼周造の『西洋近世哲学史稿』（全集の6，7巻）。これを読むには，相当学力が必要です。“良心的”かどうかわかりませんが，Schopenhauerの*Parerga*の中にある，*Fragmente zur Geschichte der Philosophie*（これは，白水社の全集10巻に翻訳があります）。

Q.2 論理学の集中講義良かったです。普段の講義に論理学は復活できないですか。

40 A.2 諸般の事情により、数年前に、私が自分で「論理学」をやったことがあります（自分で言うのもなんですが、その時も、受講生の感想によると、よかった、というのが多かったと思います）。本来は、現代哲学担当の教員がやるべきですので、そちらに言ってみてはどうでしょうか。実際、高校までの数学の授業のように、練習問題を自分で解く時間が必要ですので、集中よりは、毎週ある授業のほうが予習・復習の時間を継続してとれるのでよいのですが、4学期制になれば、週2回授業があることになるので、集中講義程でなくても、ちょっときついかもかもしれません。なお、過去に、私がやっていたころ（週1回）
45 は、特定の教科書は使わず、自分で題材を用意していたので、その記録が、私のWebサイトにpdf化して閲覧できるようにしてありますから、ご覧下さい。

Q.3 徐々に頭がフル回転した気がしました。4930~4933行目までの内容が少し理解し
ずらかったです。

50 A.3 バスカルのテキストを直訳し過ぎてわからなくなっているのかもしれない。

Q.4 p. 125, 4978行目からのApostelの発言の訳語は、科学というくくりの中で対象が自然であるか精神であるかということで、つまり区別はない、と解釈していいのでしょうか？

55 A.4 よいです。

Q.5 本来は、人文科学、社会科学なども科学という言葉には含まれているのに、現代では科学と言えば自然科学の印象が強いという話が面白かった。

60 A.5 推測ですが、19世紀以降のscienceの中で、いわゆる自然科学が発展して、scienceの中の代表的なものが見なされるようになってから（つまり、例えば、英語でもscienceといえば、まず、physicsやchemistryなどがその代表格と見なされるようになり）、日本語の訳語としての「～科学」の「～」が略された形が定着したので、「科学」と言えば、物理学とか化学とかの自然科学を主にさすようになったのではないのでしょうか。これについては、例えば、J. S. Mill の *Inaugural Address delivered to the University of St. Andrews*, 1867（岩波文庫で、竹内一誠訳『大学教育について』として訳されている）
65 の中で、文系・理系などの諸学問について言及する中で、scienceという語がどう使われているかを、原典と照合しながら読むとよいでしょう。

70 Q.6 scienceという単語に広い意味があったというのはわかりましたが、もともとの用法から狭まってきたのがなぜかが気になりました。純正科学ともう一方のちがいが少し難しく感じました。

A.6 疑問の前半は、A.5に書いた通りですが、後半は、純正科学（抽象的科学）は、数学、物理学、化学などで、もう一方は、道徳や習慣にかかわるとされていますから、倫理学や道徳学（？）、また、アリストテレスの分類に従えば、政治学などの人間や人間の社会に

75 関する学のことです。

Q.7 「science」(ママ)の訳語や意味が時代によって限定されていく点が興味深かったです。日本で今使われている「サイエンス」の意味はいつどのように伝わったのか、早く知りたいと思いました。

80 A.7 “science”と欧文には欧文の引用符をつけましょう。横文字に「」を使うのはやめてください。質問は、A.5の推測がその答のひとつですが、例えば、19世紀以降の英和辞典を調べてみると実際の年代によってどう変わっているかわかるでしょう。

Q.8 文学部の授業なので、哲学寄りになるだろうとは思っていたが、予想以上だった。た
85 しかに、科学が近代科学として確立したのは近代からなのではないとも思う。

A.8 しょうがないのかもしれませんが(文学部も近代科学も)。これは、Q.5、Q.6そして、このQ.7に関連することですが、2013年度後期の「科学哲学・科学思想史」第1回(2013.10.02)へのコメントの、A.8で、J. S. Mill の *Inaugural Address delivered to the University of St. Andrews, 1867* を紹介していますから、読んでおいて下さい。

90 URLは、下記の通り。過去の授業や他の授業のQ & Aも読むことができます。

赤井研究室

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/akyah59/>

授業関係のファイルへ

95 http://home.hiroshima-u.ac.jp/akyah59/lectures_index.shtml

Q.9 西洋哲学をWestern Philosophyと訳すことについて、先生がツッコミを入れた時、
ふと考えました。漢語やサンスクリット等における「哲学」という言葉の原義は何でしょ
100 うか。例えば、philosophyなら「知を愛す」が原義とされています。また、世界各地に
おける「哲学」という言葉の原義を調べることで、その地域では、哲学をどのような学問
として見ていたのかが分かるのではないかと、とも思いました。先生が知っている限りで教
えていただけたら幸いです。

A.9 まず、自分で調べられる限り、調べてみたらいかがですか(自分で調べるほうが勉強
105 になります)。よい思いつきのように思われるかもしれませんが、残念な結果になるの
ではないでしょうか。というのは、例えば、日本の場合、輸入品としての「哲学」しかない、
ということになるので、日本古来の(と言っても漢字は中国由来ですが)「知」だとか
「賢」だとかという表現を求めることになるからです。ご存知のように、明治の初めに、
西周が、「ヒロソヒ(philosophy)」を「希賢学」または「希哲学」とせっかく訳したのに、
「希(philosophy)」が脱落して「哲学」だけが残って通用するようになってしまいました。そ
110 して、漢語と言われますが、これもご存知のように、中国には、philosophyにそのまま相
当する表現がなかったため、日本からの逆輸入で、現代中国語でも「哲学」と言っていま

す。また、サンスクリットは今でも学術語として使われていますが、philosophyに相当する表現は、私の知る限りありません。学派によって、様々な、「哲学的な知的営み」を表す言葉はありますが、ānvīksikī は、「或るものを見ること・探求すること」（論理学とか形而上学と訳される）だし、学派にかかわらず、もっと広範囲に使えるなのは、darśanaですが、これも、「見て知ること」（「哲学体系」と意識できるかもしれません。Radhakrishnanは、a system of philosophyとか、inspection of facts, logical inquiry or insight of soulと説明しています。Indian Philosophy, Vol.1, p. 43.）という感じだし、全体として、「哲学」に相当する言葉を思いつきません。また、アラビア語でも、ギリシア語をそのまま、falsafaと言っています。つまり、「知を愛する」活動として捉えることは、古代のギリシア人に特有のことで、その他の地域でも、当然、人々は感覚的知覚、認識、論理的考察などを行なっていたはずですが、これらを全体として、ピロソピアーとして捉えるという発想がなかったのではないのでしょうか。ですから、逆に、ギリシア語由来のphilosophyが、各地に伝わったとき、その地の言葉にはなかった、新たな表現（「希哲学」とかファルサファとか）を創り出さなければならなかったのではないですか。

Q.10 “No Man’s Land” (I. 4870)が「無人境」と訳されているところで疑問に思ったのですが、“Land”がなぜ「境」と訳されるのでしょうか。私のイメージでは、“Land”は空間的広がり、で、「境」は何かを区別するための「さかい」なのですが。

A.10 「境」という漢字には、おっしゃるように、「さいかいめ」という意味の他に、「境界線でくぎられた（広がりのある）ところ、場所」の意味があり、この意味で使っています。大きな漢和辞典を引いてください。

Q.11 バスカルは、人間の研究を行うために適切なのは、外界の事物と習慣双方に就いて用いられる科学であると考えていたのか。

A.11 むづかしい問題ですが、バスカルのテキストでのポイントは、外界の事物についてのscienceと習慣についてのscienceがあって、これらとは別に、外界の事物と習慣両方についてのscienceがあるわけではない、ということですから、扱う対象は異なるとしても、同じscienceが扱うと理解できます。

Q.12 結局、英語圏・仏語圏のscienceは、「自然科学」もしくは「純正科学（抽象的科学）」という意味あいが高く、独語圏Wissenschaftとオランダ語圏Wetenschappenは、自然科学・精神科学を特別に区別していないということによかったでしょうか。

A.12 よいです。

150

Q0 ……(15行ほど)略……とにかく、静かに授業を受けますので、そっと放置しておいていただければと思います。

A.0 はい。

155

Q1 ……略……“ānvīkṣikī”を論理学とか形而上学と訳すのに、えっと思いました。論理学と形而上学は全くとは言わないまでも、かなり異なる学問のような気がしていたからだと思います。

160

A1 「“ānvīkṣikī”を論理学とか形而上学と訳すのに、えっと思いました」というのに、えっと思いました。確かに、現在の(数学的)記号論理学と、悪い意味で言われる形而上学とは、かなり傾向の異なる学問かもしれませんが、西洋近世哲学史をよく学んでいる諸君ならばご存知のように、あのカントが50歳になってはじめて正教授として就任した講座の名称は「論理学および形而上学」だったのであり、カントが何回か要請されても就任を辞退した講座が「道徳学(倫理学)」の講座だったのです。ですから、伝統的には、「論理学および形而上学」はなじみのある名称であり、これに対置されるのは、「道徳学(倫理学)」です。

165

Q.2 何語のテキストが資料として多くできそうでしょうか。

170

A.2 主に、ホワイトヘッドを読みますから、本文は英語です。が、ホワイトヘッドが、プラトン(ギリシア語)、デカルト(ラテン語、一部、フランス語)、ライプニッツ(ラテン語、フランス語)、ニュートン(ラテン語、英語)、ロック、ヒューム(英語)などに言及しますから、それらを参照します。と、同時に、時間があれば、私が、ホワイトヘッドとの比較のために、カント、ヘーゲル、ニーチェ、フッサールなどに言及する際は、ドイツ語のテキストを参照します。オランダ語は、すでに参照したアポステルだけです(予定では)。

175

Q3 前回の講義へのコメントのQ.0は、コメントを書いた方の意図するところの「抽象」の意とパスカルの意図するところの「抽象」の意が異なっていたことが質問する原因となったのだと思うのですが、辞書を引いてみると「抽象」の意味は「事物または表象からある要素・側面・性質をぬき出して把握すること」としか書かれていませんでした。とすると今回の「抽象」の意の捉え違いは何が原因なのか気になりました。私たちが普段「抽象」の意を曲解しているということなのでしょうか。

180

Q.3' 「抽象」に関するQ & Aに代表されるように、ある1つの言葉でも意味の受け取り方の違いが理解に大きな影響を与えることを再認識しました(私もQ.0の質問者に近いとらえ方をしていたので)。しかし、パスカルのいう「抽象」を「引き出す」とか「切り捨てる」と日本語では訳します(そもそも“abstractio”すら「抽象」と訳しています)が、一体

185

どのような経緯でその理解にたどりついたのか気になりました。著書の中で “abstractio” についてパスカルは詳しく言及しているのでしょうか。外国語を「翻訳」していくうちに、海外の思想家の考え方にズレが生じる事はないのでしょうか。（下線は赤井による）

190 Q.3' ' パスカルのいう「抽象」の意味は、現代において用いられる「抽象」の意味より時代的に先行しているのか。

A.3 Q.3の質問者の指摘する通りです。日本語としての「抽象」の意味は、ヨーロッパ中世以来、パスカルにおいても変わらず使われていますが、今の日常的な日本語で、「抽象的」となると、本来の「抽象」の意味から、ある意味で、逸れて、「曖昧な、漠然として、とらえどころのない」というニュアンスで使われていることが問題だと思います（同じ辞書で、「抽象的」はどう説明されているか、調べてみてください）。ですから、Q.3' の質問者に対しては、パスカルは、中世以来のはじめからある、本来の意味で用いているので、特に説明する必要もなく、「抽象」を本来の意味で使っている、とすることができます。また、「外国語を「翻訳」していくうちに、海外の思想家自身の考え方にズレが生じる事はない」のでしょうか、「海外の思想家の考え方」と、それを翻訳し、解釈する側の理解との間には、しょっちゅう、ズレが生じています（そういう例はいやというほどあるので、折りをみて紹介してもよいですが、うんざりしますよ。むしろ、ズレ、いや、誤訳によって飯を食っているようなところがあります）。その原因は、翻訳者の力量不足、誤解、誤訳による場合と、訳は正しくても、それを読む側の日本語の語彙の不足や読解力の不足です。Q.3' ' に対しては、すでに明らかなように、パスカルの用いる「抽象」の意味も、現代の日本語で正しく定義された「抽象」の意味も同一であるので、先行云々ということは意味をなさない、と言えます（強いて言えば、日本語の日常的な「抽象的な」の意味が後からでてきたのだらうと思います）。

210 Q.4 純正科学（抽象的科学）について、何を言っているのかは分かりましたが、結局、パスカルは人間についての科学は、自分を慰めてくれ、また、自分のおかれている状況を迷わせるといったように、純正科学よりも人間科学が難しいし大事なものと認識しているのでしょうか。それとも、2つの優劣は別として2種の科学の違いを言っているだけなのでしょうか。

A.4 同じscienceの違う側面を言っているのだと思います。しかし、優れた数学者・自然科学の研究者（esprit de géométrie, 幾何学的精神）としてのパスカルでありながら、と同時に、敬虔なキリスト教徒として、特に貧しい人々には心をくだいて、友人たちと私費を投じて、乗り合い馬車の事業を始めたパスカルにとっては、人間の問題（esprit de finesse, 繊細の精神）のほうが大切だったことは確かだと思います。

220 Q.5 哲学史の勉強をするにあたって、やはり古代ギリシアから時代順に追っていった方がよいのでしょうか。そうなると、かなり初期でつまづきそうなんです。

A.5 今学期の「西洋哲学入門」で紹介したヤスパースの『哲学入門』の付録にあるアドヴァ

225 イスに言われていたように、一方では、自分が関心をもった哲学者の著作か問題（近現代のものになる人が多いと思います）に取り組みながら、同時に、西洋古代哲学史、西洋中世哲学史、西洋近世哲学史、哲学概論などの講義を自分の関心とは関係なく勉強するためのペースメーカーとして利用して、一冊ではなくて、複数の異なる哲学史の書物と比較しながら、講義で先生が言っとることはほんまかいな、この先生の力量は大丈夫なんか、と疑いながら勉強すればよいでしょう。その際、自分が関心をもった哲学者が近現代の人で、その人が、エピクロスについて言及していれば、その都度、エピクロスについて古代哲学史で調べ、アウグスティヌスについて何か言っていれば、その都度、中世哲学史で、アウグスティヌスについて中世哲学史の本で調べる、というように、何も、時代順に勉強する必要はありませんから、かなり初期で躓くということはないと思います（もっとも、その都度、躓くかもしれませんが、何かわからないことがあれば、遠慮せずに質問しに来て下さい）。

235 Q.6 「知を愛す」ではなく「知を憎む」というのがあるかもしれないというお話がありました。あれはただの冗談ですか。それとも何か考えがあって話されたんですか。

240 A.6 ただ(註1)の冗談といえば冗談ですが、ただ(註2)、「知」をどのように捉えるかによって、また、「憎む(miso-)」というのを、広く解して「きらう、さける、遠ざける」という意味に解すると、禅のようなやりかたが、ちらっと脳裏を過って(よぎって)いたのは確かです。

(註1)「単なる」の意味、(註2)「ただし」という断り書きの意味。

245 Q.7 ホワイトヘッドと言えば、コテコテの数学、物理学者だと思っていたので、大学で、神について語っていたという話を聞いて、少しおどろきました。しかし、良く考えてみると様々な自然科学の学者が、神に言及してきたことを思い出しました。ニュートンやインシュタイン等々。彼らは物理学での成果の面だけが、取りざたされていますが、これは宗教にあまり関心がない日本だけのことなのでしょうか。

250 A.7 この質問者とは逆に、私は、たしか大学1年と2年の間の春休みに、神戸の古本屋で、*Process and Reality*の旧版の原書を手に入れてつまみ読みしたのが、はじめてのホワイトヘッドだったので、最初から、哲学者、形而上学者というイメージがありました（実際には、論理学・数学→物理学→哲学というのがホワイトヘッド自身のたどった分野なので、私が最初に知ったのはホワイトヘッドの最後の姿だったわけですが）。ラッセルとの共著『プリンキピア・マテマティカ』のことは、論理学を学ぶようになってから知りました。

255 終りの方の、「宗教にあまり関心がない日本だけのこと」というのは、日本で、いわゆる「哲学」をやっている連中の多くが、哲学として（哲学の範囲内で）神の問題を扱うことをしない傾向があることと、そういう彼らの発言（書籍などによる）に影響されている世間の人たちが少なくないことによるのかもしれませんが。

260 Q.8 ホワイトヘッドのcutting-offの話聞いて、なんとなくソシュールの分節化を思い
出しました。ほぼ同時代人なので、自然認識について何かしら影響を受けているものなの
でしょうか。

A.8 ご存知のように、ソシュールは、論文を除くと、ほとんど著作のない人ですが、有名
な『講義』が世に出たのは、没後の1913年以降（1916年出版？）ですから、ホワイトヘッ
265 ドは、その内容を知り得たでしょうが、影響関係はわかりません。むしろ、同時代人のホ
ワイトヘッド（特に、『過程と实在』の有機体の哲学）への影響という点では、アレグザ
ンダー、ブラドリー、ポーサンケ（ット）、それに、ベルクソンが重要です。逆に、英語
の文献を読み、しばしばアメリカ、イギリスへも行っているベルクソンは、（私の知る限
り、著作では名前を挙げなくても）、ホワイトヘッドを知っていたらと思われれます。

270 実際、ベルクソンと会っている九鬼周造は、帰国後、京大でベルクソンを演習のテキスト
に取り上げたのは当然として、講義では、ホワイトヘッドに言及しています（九鬼の最後
の講義は昭和15（1940）年で、翌年亡くなっていますから、日本で哲学者としてのホワイ
トヘッドに言及した、かなり、はやい例ではないではないかと思えます）。また、その後
の、フランスにおけるホワイトヘッド研究としては、ジャン・ヴァールのものがあります
275 (Wahl, J., "La philosophie spéculative de Whitehead", *Vers le concret*, 1932.
Paris : Vrin 所収)。

280

285

290

295

300 Q.0 . . . (略) . . . 哲学・思想と、数学・物理などの所謂「理系」の分野はそんなにも結びつきが強いものなのでしょうか . . . (略) . . . 結びつきが非常に強いものであるならば、我々は「哲学」「数学」「文学」など分野を細分化しすぎているのかな、という気さえしてきます。それとも、有名な哲学者が「万能」すぎるだけなのでしょうか。

305 A.0 「文系」「理系」の定義と分け方は(大学の受験科目を考えると便利ですが)学問分類を全体として考えるとき、再検討を要することがらのように思います。古代ギリシアの「ピロソピアー(哲学)」が、ある意味では、全ての学問分野の総称でもあったように、本来の哲学は、その研究対象として、現在、我々が言う「文系」も「理系」もすべて含んでいたのですが、個々の学問領域は、細かく分かれて細分化する方向と、細分化しすぎたことから反省して、逆に、総合する方向と、その両方の動きが、常にあるように思います(この2つの方向・傾向が「常にある」という点は、ホワイトヘッドがいう「アテナイ型」
310 と「アレクサンドリア型」という区分も、似ています。似ているのであって、同じではないですよ。念のため)。この点で、広島大学文学部の分野構成(というより、実際にやっていること)は、特に、哲学系は、いわゆる「文系」に偏り過ぎています(他の国立大学の文学部の分野構成を調べてみてください)。そして、2つ、あるいは、3つの要素がある場合、それぞれかにだけ偏るとするのは、哲学にとっては、致命的な欠点になる、とだけ
315 言っておきましょう。

Q.1 ニュートンは自分が「万有引力の法則」を発見したにもかかわらず、「賦課説」を支持していたとおっしゃっていましたが、それはニュートンの「本心」だと思われませんか? 世間に対する「方便」であったような気がします。

320 A.1 それは、ニュートンにきいてください(つまり、ニュートンが書いたものを読み、ということ)。デカルトについても、「神の存在証明」をやっていることを指して、(本心ではないから)「仮面の哲学者」とか言われたりしますが、何故か、17世紀の哲学的天才達は(ホワイトヘッドによると、17世紀は、天才の世紀)、デカルトも、パスカルも、スピノザも、ライプニッツも、(そして、ニュートンも)熱心に神について語っているのですが、これが、18世紀になると(例えば、カント)、コロツと態度が変わって、神の存在
325 を信じるのは自由だが、学問的には証明できない、と言い出します。どこかの時点で何かが起こっているのでしょうか、社会的な状況が変わった(社会的な締め付け、教会の権威が弱くなった)から、みんな、本心を言えるようになった、というだけでは、何か寂しい、
330 というか、何か違うと思いませんか。

Q.2 [自然の法則について、意見や質問多数]

A.2 慌てないでください。いろいろと質問されていることは、これから授業の中で少しずつ考えていくべきことでしょう。ただ、ホワイトヘッドが語っている「自然の法則」とい

335 うのは、概略を読んだだけでわかるようなものではありません。また、これらは、観点（あるいは、哲学的な立場）の違いによるものなので、同一のレベルで処理できるような排他的な区分ではありません。どれかが正しいとか間違っているという問題ではありません。これらの背後には、科学思想史というよりも、ほとんど、哲学史というべき、思想的な背景がそれぞれにあります。ですから、物理学そのものにたずさわっている人の関心事ではありません（つまり、物理学の研究対象ではないということ）し、物理をやっている人も、340 意識していなくても、物理を離れて、「自然の法則」って何？と尋ねれば、考えたことない、というか、4つのうちのどれかに分類される答をするかもしれません。ただ、この分類は、「自然の法則」がもし何らかのかたちであるとすれば、という前提に立っていますから、「自然の法則」はない、という立場は問題にされていません。

345 Q2.0 ……（略）……ところで、記述説について、『観測された継起の記述』（ママ）の『継起』（ママ）とは何のことはよく分からなかった。

A.2.0 引き続いて起こる出来事です。なお、引用部分は、奮名ではないので、「」にしましょう。

350 Q2.1 ……（略）……128ページの5100行目からの日本語訳部分がよくわからなかったので英文を含めて読みなおそうと思いました。

A.2.1 これは、英文の理解や日本語の言葉の理解以上に、哲学史の知識が必要でしょう。テキストを読んでみましょう。

355 Q2.2 「自然の法則」のうち「規約説」は、実証されたものが「規約」として承認されるということか。

A.2.2 実は、この「規約説」は、微妙で難しいところです。というのは、規約というのは、人間どうしの人為的な約束、取り決めだから、ある集団（物理学なら物理学者の間）の中で、合意が得られていればよいのか、というと、それでは恣意的になるおそれがあるので、360 そうでもない、何か、人為的なもの以外に根拠がなければならない、というニュアンスで語られています。

Q.3 レポートのテーマは、自然の法則についての事柄のみということですか。

A.3 一応そのつもりですが、まだ、正式に、課題を伝えていないので、課題がどういって365 いるかとそれを諸君がどう理解するか次第です。ただ、「自然の法則」について扱うのが、正攻法だし無理がないと思いますが。

370

Q.0 5191行目の「至知至能」ですが、これは「全知全能」と同じ意味でしょうか。

A.0 「至るところまで至っている」ということなので、ほぼ同じと解して下さい。

375

Q.11.5140 「もし邪神の崇拝が異教徒を盲目にしなかったならば・・・」とありますが、ニュートンのいう“false Gods”とはキリスト教の神のことなんでしょうか。

A.1 そうではなくて、異教徒というのは、非キリスト教徒のことですから、例えば、ギリシア人の考える神々などです。

380

Q.2 授業中にちらっとおっしゃったグリム（を引く）とは辞書のことですよね。今までも何度かそのような名前の辞書が有ると聞いたのですが、何という辞書ですか？

385

A.2 あのグリム兄弟が作ったドイツ語辞典（独-独）です。全部で33巻あり、英語のOEDのように、歴史的な記述、用例の豊富な辞書です。私が学生の頃、日本ではこれを使いこなせる人は3人いるかどうか。．．と聞いたことがあります。哲学研究室には、学生が使えるように、ペーバックですが、Dudenの10巻本とともに、揃えてあります。一度、引きに来てください。場所を取るのと高価なので、家では、CD 2枚の Der Digitale Grimmを引きます（というより、見ます。今では、Web上で誰でも無料で閲覧できます）。普段は、Wahrigの小辞典か、Dudenの1巻本を使っています。グリムをめくって哲学研究室では、笑えない笑い話があります（形容矛盾か？）。

390

Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. ～グリム

Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden. ～ドゥーデン

Duden Deutsches Universal Wörterbuch A-Z. ～ドゥーデン

395

Wahrig, *Deutsches Wörterbuch.* ～ヴァーリッヒ

dtv Wörterbuch der deutschen Sprache, Wahrig ～ヴァーリッヒ

Ullstein, *Lexikon der deutschen Sprache.* ～ウルシュタイン

Sanders, *Wörterbuch der deutschen Sprache, 3 Bde.* ～ザンダース

Muret- Sanders, *Enzyklopädisches englisch-deutsches und deutsch-englisches*

400

Wörterbuch. Große Ausgabe. ～ムツレット- ザンダース

Q.3 ニュートンが、「超越的存在」を想定せずに議論を進めたことは全くないといえるか。

405

A.3 自然哲学・物理学・天文学の研究そのものは、「超越的存在」自体を対象にしていないので、「超越的存在」を想定せずに、というより、「超越的存在」に触れずに議論を進めることができますが、自然哲学・物理学・天文学の研究の外に立って、何故、その研究・探求が可能なのか、を問題にすると、ニュートンの場合は、理神論になるのではないのでしょうか。

410 Q.4 128ページの5100行目めからの日本語訳について、申し訳ないのですが、「ニュートンの不動の受容者immovable receptacles」について、もう一度どういう人達のことが説明してもらってもよろしいですか。

A.4 はい。この箇所（『過程と実在』）は、難しいので、そもそも、十分に説明していません。私は、ニュートンや物理学は専門でないので、わかりません、と言いたいところですが（もう言ってる）、まず、「不動の受容者」というのは、「人達」ではなくて、「それ自体は不動（つまり、変化しない）で（何かを）受容するもの（あるいは受容体）」という意味です。ホワイトヘッドは、この箇所では、これだけしか言っていませんが、他の箇所の記述によれば、ニュートンにとっての、この宇宙、世界、自然は、いわゆる彼の「絶対空間・絶対時間」を受け入れて変化しないものと考えられていた、ということになります。そういう宇宙が「不動の受容者」と言われています。

420 Q.5 「賦課」をされた「自然の法則」を探求することが、科学の目的であると考えたらよいのですか？それとも、その「自然の法則」では人間にとって不利益である部分を、補完する目的で探求することを科学というのですか？両方ですか？

A.5 この箇所では、「科学の目的」ということを考えていません（ので、こんな質問が出るのは新鮮で、いい感じです。が、ホワイトヘッドの問題設定、関心からは外れています）。まず、この世界（宇宙、自然）とは何か、どうなっているのか、という関心から出発しています。ですから、科学の目的というより、科学の仕事・任務が、「自然の法則」を探求することだ、とは言えます。人間にとっての利益・不利益という問題は、科学（エピステーメー）ではなくて、科学に基づいた技術（テクネー）の課題である、という考え方があります（アリストテレスなど）。

430 Q.6 「自然の法則」に関して、法則を内在するものとする説、課せられたものとする説の違いがあいまいです。P132(ママ, p. 132)のカントの引用だけを読むと、内在するものとする説に近いと思えるのですが、間違いでしょうか。

A.6 間違いです、哲学的に言って、『純粹理性批判』では、神が存在することを学問的に証明することはできないという立場をとっているとしても（それは、学問的には、存在するとも言えないし、存在しないとも言えない、ということです）、批判期以前に、いくつも書かれた自然科学に関する論文は、明らかに、神の存在を前提しています。というより、神の存在を前提して初めて、（神によって課されてあるはずの）「自然の法則」を探求することができたのです。この点で、カントは、ニュートンの理神論の線に沿っていると言えます。カントの前批判期のテキスト資料を参照してください。

Q.0 赤井先生は料理は得意ですか。その場合、得意料理は何ですか。

A.0 得意ではありません。しかし、最近は、ほぼ毎日、ポテトとカボチャのサラダを作っています。以前、にくじゃがをつくって、某先生にさしあげたところ、某先生のばあちゃん(?)という方から「赤井先生のにくじゃが、スツツツツツツツツツゴクおいしいねえ〜」とのお言葉をいただきました(ここまで言われると、リップサービスですね)。

Q.1 今回読んだカントのテキストについて、カントの著書が多いのは知っていたが、やはり『純粹理性批判』など三批判書の印象が強かったので、今回のように神について言及しているのは新鮮だった。また、教授就任論文から、『純粹理性批判』を書くまでの10年間は沈黙の10年で主だった著作はないものと思っていたので、自然科学の色が強い著作があったとは驚きだった。

Q.1' カントの前批判期にあたる時期には、理神論に基づく自然科学が一般的であったか。

Q.1' ' . . . (前畧) . . . 彼(カント)の「思想」や「考え」の変遷は前批判期と『純粹理性批判』期の二期に大別できるという認識でいいのでしょうか。確か、フッサールの「思想」はかなり時代によって変化していたので、カントはどうなのか気になりました。

A.1 近世哲学史は私の専門ではないので、わかりませんが、Q.1については、ちょっと、正確に言わなければなりません。哲学をやっていれば常識の範囲内でいうと、カントは、1747年の『活力測定考』、1755年(31歳)の『天界の一般自然史と理論』、資格論文『形而上学的認識の第一原理』(ラテン語)以降、数々の自然科学関係のものを含む論文・著作を書き、1770年(46歳)の就職論文『可感界と可視界の形式と原理』(ラテン語)以降、1781年の『純粹理性批判』初版まで、著作がありません。ですから、「自然科学の色が強い著作があった」のは、「沈黙の10年」以前の事です。Q.1' に関しては、後の理神論のところも参照してほしいのですが、17~18世紀のイギリスの自然科学者たちから始まった立場で、啓蒙期にフランス、ドイツへも影響を与えたことから、イギリスでは、「理神論に基づく自然科学」が、一般的であったかどうかはわかりませんが、少なくともあったとは言えるでしょう。また、Q.1' ' については、テキストを自分で読まないで、推測や他人の説の受け売りをすると、ショーペンハウアーに軽蔑されますから(ショーペンハウアーの表現は、どうやら、鳩摩羅什に由来するようです)、自分で読んで確かめてほしいのですが、私が見る限りでは、カントはルソーやヒュームから刺激を受けたりすることはあっても、基本的には変わらず、神の存在や宇宙の永遠性、魂の問題などについては、『純粹理性批判』以降は、哲学としては、然りとも否とも言えない、という態度をとるようになったことが大きな違いだと思います。このことは、1793年の『もっぱら理性の境界内での宗教』の出版にあらわれていると思います。なお、前批判期と『批判』以降で基本的に変わっていないというのは、カントの生前完成せず、後に遺稿として、アカデミー版で1400ページを越える2巻本として残された、カントが自分の主著と見なしていたも

のがあり、それは『自然科学の形而上学的原理から物理学（自然学）への移行』と題されるはずで、表題からわかるように、1755年(31歳)の資格論文『形而上学的認識の第一原理』（ラテン語）につながるものなのです。カントの関心は、最晩年になって、形而上学
485 から、前批判期に多く扱った、自然科学関係の問題へと、再び、向かっていたことがわかります。

Q.2 つい先日ですが、カントの「純粋理性批判」（ママ）で、神の存在の不可能性についてを読んだので、それ以前にカントが神の存在を前提とするような考えを持っている（ママ）ことに疑問を感じました。
490

A.2 まず、匿名ならば、『純粋理性批判』と『 』を使ってください（これは守ってください）。また、これは、ルールにまではなっていませんが、具体的な物を「持つ」ときは、漢字で「持つ」と表記し、考えなど物体でないものを「もつ」ときは、ひらがなで「もつ」と表記するという流儀があります。手書きで原稿が書かれていた頃は、ある程度、まもられていたようですが、ワープロ、パソコンが使われるようになって、区別なく漢字に変換されるので、日本語の表記が乱れたと思います。それはさておき、言葉使いを正確にしなければなりません。すでに授業で指摘しているように、『純粋理性批判』でカントは、神の存在の証明が不可能であることを言っているだけでなく、その反対（つまり、神が存在しないこと）の証明も不可能であると、言っているのです(B699, 資料追加を参照)。つまり、学問として、哲学として（先験的哲学）は、神が存在するとも存在しないとも証明できない、という立場なので、『純粋理性批判』の次元を離れば、カントが神の存在を認めていて、神について語っていても、何ら不思議なことではありませんし、神について語ることが社会に対する方便ではなくて、カントの本心であったと思います。そうであるからこそ、『純粋理性批判』を出版した後になっても、神について語っている書物である、
500 前批判期に書いた『天界の一般自然史と理論』を出版したのでしょう。
505

Q.3 前回のコメントへの返答で、笑えない笑い話というものがありませんでしたが、今現在出版されているドイツ語のカントの著作で、カントが書いたそのままのものでない箇所が存在する版もあるということでした。このことは、仮に私が原典だと思って読んだものが、オリジナルとは異なる場合が（カント以外の人物の著作）あるということの意味だと思うのですが、これは単に言葉が時代を経て変化していった結果であり、大して考慮しなくてもよいものでしょうか。
510

A.3 カントのように、近世の印刷出版の時代のテキストでは、「オリジナルとは異なる場合」というのが、直ちに、「カント以外の人物の著作」ということではありません。ほとんどは、ある単語の有無や綴りの違いとか、小さな違いで、手書きの原稿と印刷物の違い、版による違いなどです。小さな綴りの違いでも、dannとdennでは、意味が違うので、内容的には重大な違いになる場合もあります。『判断力批判』の場合は、カントの生前に、A版、B版、C版と3つの版が出ていて、微妙に違うところがあるので、どれをカントにとっての
515

520 決定版として受けとるかで研究者の間で違いがあります。ですから、例えば、『純粹理性
批判』を読む場合でも、A版、B版のリプリント、Felix Meiner社のPhB（ペーハーペーと
読む。Philosophische Bibliothekの略）のTimmermann校訂の新版とSchmidt校訂の旧
版、Weischedel校訂のSuhrkamp版、他に、Cassirer版やReclam文庫など、どれかを基
準にして、他に手に入るものと比較しながら読む必要があります。同時に、解釈史を知る
525 の基本ですが、近世哲学史の演習でのこのトレーニングは、古代中世ほど、徹底してい
ないように思います。

Q.4 つい先日、先生が紹介されているT・クーン（中山茂訳）『科学革命の構造』を購入
したところだったのですが、なにがどう「ヤバイ」のでしょうか？紹介されている以上、
530 参考に値しない、というわけではないとは思いますが。．．．

A.4 訳者の中山氏は、クーンのところで勉強した人ですから、日本語訳はこれが決定版の
はずですが、「異常科学」とか訳語が変です。もっとも、abnormal（異常な）をnon-
normal（非通常）と区別するためには、仕方なかったのかもしれませんが、自分の本を探
535 して出してバラバラめくってみると、書き込みから、友人達との勉強会で、この本を
1993年に通読していることがわかりますが、ところどころ、原典と照合して読んだらしく、
英語が書き込んであります。是非、原典と照合しながら読むことをすすめます。

Q.5別の受（ママ、授）業で『古事記』を少しだけ読んだのですが、日本の神々は、概（マ
マ、既）に「天地」が存在したところに現れて日本の国を生んでいて、西洋の神のように、
540 「万物創造」はしていません。とても不思議に感じました。なぜだか教えてください。先
生は「天皇」について話される時も、「神」について話される時とおなじように敬語を使
われますか？

A.5 「なぜだか教えてください」と言われても、わかりません。ただ、西洋の神のように、
「万物創造」といっても、無からすべてを創造するのは、ユダヤ・キリスト教の神であっ
545 て、ホワイトヘッドのテキストに出てくるので、いずれわかるとは思いますが、プラトンの
『ティマイオス』のデーミウールゴス（制作者=神）は、すべてを造るのではなく、既に
在るコーラー（場=質料、素材）を用いて世界を造りますから、西洋にも、「万物創造」
ではない考え方もあるのです。

550 Q.6 理神論という考え方を知って面白いものだと思った。これは科学的な点から神を否定
しているのでしょうか？そうであれば、自然の秩序を保証するものとしての神も否定する
ものにはならないのですか？

A.6 すくには、なりません。しかし、理神論も後期になると、合理的思考が優勢を占め、
啓示を認めなくなる方向に進みます。実際、理神論にも程度の差があるかもしれませんが、
555 資料で、定義を検討してみましょう。

560 Q.7 神が創造したという自然法則の中には、私たちの論理的思考能力（推論の能力）も含まれているのでしょうか。（含まれると私は思いますが、あるいはふくまれていないと考えた人もいるのでしょうか）また、含まれているとしたら、神は、私たちが彼の存在にたどりつけるようにしているのでしょうか。（過去の神学者や哲学者でそこ（ママ、れ）について、どう考えていたのでしょうか）

565 A.7 ホワイトヘッドの問題設定から逸れますが、よい質問です。配布したテキストでは、ホワイトヘッドは、世界（自然）の外から、特権的な立場で、自然の法則について考察していますが、自然の法則を探求する私たち自身も、自然の一部だとすれば、当然、私たちの身体だけでなく、精神的な活動も、その法則に支配されているはずですから、当然生じる疑問です。ただ、『観念の冒険』では、第三者的な立場から、自然の法則について人類のいただいた考え方を概観し、『過程と実在』で、それに加えて、認識する主体としてのわれわれのことも問題にされます（ただし、この認識主体も考察のために必要な拠り所として一旦設定されますが、最終的には、消失する方向にもっていく感じで、これがうまくいっているかどうかは、問題でもあり、検討するに値するもので、魅力のあるところでもあります）。

575 なお、自然の法則というと、「私たちの論理的思考能力（推論の能力）」が法則性をもっているように思われるので、「私たちの論理的思考能力（推論の能力）」と自然の法則の関係を考えがちですが、私たちの認識能力全体を問題にすると、論理的思考能力（推論の能力）よりも、直観の能力も考慮に入れなければならなくなります。世界の創造を問題にする場合は、私たちの直観の能力も込みで、どう創られているのかを考えなければなりません。しかし、創造論をもたない哲学の場合は、はじめから何らかの直観の能力と推論の能力があることを暗黙の前提にしているように思います。一方、創造論をもつ哲学・神学の場合は、多くは、人間の能力に限界を認めながらも、不完全ではあっても、何らかの仕方

580 で、「神は、私たちが彼の存在にたどりつけるようにしている」という前提で議論を進めています。逆に、私たち人間の認識能力に否定的な立場に立つ人たちの発言を検討すると、両者の関係を相対化して見ることができるかもしれません。例えば、ニーチェなど。

585

590

595

Q.0 講義(ママ、籟)資料で提示された天野貞祐訳、カント『純粹理性批判』先験的弁証論の訳ですが、文体が察するに少なくともここ数年に訳されたものではない、それなりに昔のものだと、... (略)... 少し違和感を覚えました。

600

Q.0' ... (略)... 日本語訳の日本語が難しく感じます。まわりくどく感じたり、ややこしいいい回しだったり、日本語は難しいと思いました。

605

A.0 実は、天野訳は『純粹理性批判』の全訳としては、日本初訳(1921, 1931)なので、日本語としては当時の文章語ですが、藤野渉先生が、『純粹理性批判』復習ノート(名古屋大学文学部の紀要、その後、『哲学とモラル』汐文社(1979)所収)で、当時出版されていた、天野訳、高嶺一愚訳、篠田英雄訳、原佑訳、他に三渡訳(論文中の部分訳)などを原典と比較検討していますが、全体として、天野訳がもっとも誤訳が少なくて正確なのです。それで、日本語の古さにもかかわらず、紹介しているのですが、その後、全集の有福先生の訳など数種類の訳が出ていますが、全体としては、まだ、天野訳が一番信用できると私は思います。N.Kemp-Smithの英訳は、ときどき意訳がすぎる感じ、A. Tremesaygues と B. Pacaudの2人による仏訳と G. Colli 監修の伊訳のほうが直訳的な感じ、

610

Q.1 刹那滅について興味深く聞かせていただきました。小川先生の仏教学の授業でも出てきたのですが、この考えはインドやヨーロッパのみの考え方なのでしょうか？イスラム教や仏教ではこの考え方は否定されているのでしょうか？

615

A.1 不可解な質問です。「イスラム教」はともかく、ひょっとして(vielleicht)、「仏教」というのは、中国や日本の仏教を指して言っているのでしょうか。というのも、仏教学の授業で出てきたと言われて通り、「刹那滅」は、説一切有部に独特な発想です。つまり、「刹那滅」は、お尋ねの、まさに仏教の考え方です(仏教にも様々な考え方があるし、もともと仏教が発生したインドでは、今では、仏教は主流でなくなってしまっていますが)。ヴァスバンドゥ(世親)の『アビダルマ・コーシャ(俱舍論)』に「一切の有為は有刹那なり」(13. 2b)とされています。イスラム教(イスラーム教)は、専門でないのでわかりませんが、素人のレベルでわかること(アラビア語の原典を読まずに、翻訳や研究書などの二次文献からわかること)は、イスラム神学は、原子論で世界を説明し、学派によって違いはあるが、アシュアリー学派では、偶有(屬性、付帯性、性質)は持続せず、瞬間毎に神が創造していると考えられていたようです。まさに、「刹那滅」と同じ考え方です。基体(原子)も同様に、偶有が消滅すれば原子も消滅し、次の瞬間に原子は偶有とともに創造され、神が瞬間毎に創造するというのです。この点で、恒常的な原子を想定するギリシア人の原子論と違いますね(赤井の感想)。いずれにせよ、質問に対しては、「刹那滅」の考え方は、イスラム教にも仏教にもあります、というより、そもそも、「刹

625

630 那滅」は、仏教の考え方です。なお、以下の文献を参照。

竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世 III 神秘哲学』（2012、岩波書店）所収の、青柳かおる「2 イスラームのコスモロジー」p. 51.

井筒俊彦『イスラーム思想史』（1991、中公文庫）、pp. 84 - 88.

中村廣治郎『イスラームの宗教思想 - ガザリーとその周辺』（2002、岩波書店）、pp. 171 - 182.

635

Q2 神が創造と消滅を一瞬一瞬で繰り返しているというのは、もはや仮説のように感じた。

B. ラッセルの懐疑論的な世界五分前仮説や、フィリップ・ヘンリー・ゴスの創造論的なオムファロス仮説に近いものを感じた。

640 A.2 「仮説」というのがどういう意味で言っているのか次第ですが、哲学史や思想史として研究しているので、現在の私たちにはピンとこない考えでも、何故彼らはそう考えたのか、そう信じたのかを探究するのがこの仕事です。

Q3 ある時の一点 T_n について、 T_1 と T_2 は（われわれはこれらを連続した時間であると据
645 （ママ、捉）えているけれども）実際は神の生み出した一瞬一瞬である、という認識が非常に興味深かったです。現在地球上には約70億という人類が生きていますが、その一人ひとりを神が支配していると考えれば、神は大忙しだと思いました。また、人類だけでなく動物や植物などあらゆる命がありますが、神はこういったすべての命の一瞬一瞬をも管理している、ということもできるのでしょうか。

650 A.3 そうです。私たちが命あるものと思っていないすべても物体もふくめてすべてを、です。

Q4 . . . (略) . . . 理神論の話がとても興味深かったです。キリスト教と理神論を両立というのがあまりイメージがわかりません。

655 A.4 授業でも指摘したように、理神論にも初期(17世紀)から後期(18世紀)と内容に変化があり、初期の理神論は、キリスト教を近代的科学の合理性と調和させ、反理性的、神秘的側面を取り除くという目的をもっていましたが、ある程度までは、調和するとしても、これを徹底すると(後期)、真の宗教は、超理性的もの(啓示とか)を必要としない、と主張するトーランドやティンダルらのように、やはり、正統的キリスト教会と対立することになりました。と同時に、福音書や伝承を、現代の私たちの言葉で言えば、心理学的、社会学的、歴史学的(史料批判的)に取り扱う、つまり、宗教を学問的に扱う端緒を開き、
660 ヒュームらの実証主義につながっている、と言えます。

Q5 ニーチェの認識能力の批判の批判の例えとして、鉛筆や金槌を挙げられ、とてもわかりやすかったのですが、認識能力は他のものに優越して特別なものだ、という主張が仮に
665 あったとすれば、鉛筆はそれ自身に字を書くことはできないが、認識能力は認識とは何か

を明らかにすることができる、といっても良い気がします。ニーチェはどういった根拠で、「それ自身を定義することができない」と言っていたのでしょうか。

670 A.5 「認識能力の批判の批判」という表現は、たぶん、これで正しいんでしょう。最初の「認識能力は認識とは何かを明らかにすることができる、といっても良い」というのは、およそ、認識について肯定的に論及している人はみな、ある限定・条件つきにしても、あてはまるでしょう。デカルトもカントも。それに、同じように、道具の喩えで、カントを批判しているヘーゲルすらそうです（デカルト、ヘーゲルは資料を参照）。問題は、どう

675 いう限定・条件つきであるかにかかっていると思います。従来認識理論を批判して、自分の理論を構築しようとする際のフッサールも同じようなことを言っています（資料参照）。この点、ニーチェは、従来認識理論を批判するところまでは同じですが、これまでであったものをぶちこわすだけで、何かあたらしいものをつくるわけではないところが他の人と違うと思います（資料参照）。もっとも、ニーチェの場合、そのこと自体に意味があるのでしょうけれども、西洋古代哲学史概説でも紹介したように、ニーチェは、早い時期から、当時の大学の哲学の傾向を、認識論中心だといって批判していました。もう一度、引いておきましょう。

680

ギリシア哲学の特徴（近現代哲学との違い）

685 Überhaupt in's Grosse gerechnet, mag es vor Allem das Menschliche, Allzumenschliche, kurz die Armseligkeit der neueren Philosophen selbst gewesen sein, was am gründlichsten der Ehrfurcht vor der Philosophie Abbruch gethan und dem pöbelmännischen Instincte die Thore aufgemacht hat. Man gestehe es sich doch ein, bis zu welchem Grade unsrer modernen Welt die ganze Art der Herakliten, Plato's, Empedokles', und wie alle diese königlichen und prachtvollen Einsiedler des Geistes geheissen haben, abgeht; . . . Die Wissenschaft blüht heute und hat das gute Gewissen reichlich im Gesichte, während Das, wozu die ganze neuere Philosophie allmählich gesunken ist, dieser Rest Philosophie von heute, Misstrauen und Missmuth, wenn nicht Spott und Mitleiden gegen sich

690 rege macht. Philosophie auf "Erkenntnistheorie" reduziert, thatsächlich nicht mehr als eine schüchterne Epochistik und Enthaltensamkeitslehre. [F. Nietzsche, 1886, *Jenseits von Gut und Böse*, 204, KTB 76, S. 120-121; Schlechta, II, S. 664-665.] (大意)

695 今日、哲学に対する畏敬の情を、徹底的に破壊したのは、最近代の哲学者たちが、人間的でありすぎたからだ。試みに、思え！ Heracleitos, Platon, Empedoclesなどの傾向が、いかに全く近代のものと異なっていたかを。(中略)それに反して、science, Wissenschaftだけが発達したのに、全体としての哲学は、ますます、意気消沈している。いわゆる認識論のみに後退してしまつた哲学は、消極主義の引込み思案の哲学であるにすぎない。[ニー

700

705 チェ, 1886, 『善悪の彼岸』204]

Q0 今日の授業では語学の重要性を再確認させていただいたのでございますが、私の年齢で外国語を学習することは、本当に困難なことなのでございます。サンスクリット語のような難解な古典言語を学ぼうとしていること自体が信じられないことなのでございます。ただ、私が今サンスクリット語に費やしている時間を、もし、英語学習に充てたとしたら、少しは、Toeicの点数が上がるのではないかと悔しい思いに浸っているのです。先生が授業で「でございます」とおっしゃった回数は、98回でございました。カウントするのに精一杯だったので、今日は授業の内容は全然わかりません。

715 A0 そうで、ございましたか。申し訳ございません。しかし、でございます、年齢には関係なく、いや、むしろ、年齢を重ねたほうが、学習には適しているとする説もでございますので、サンスクリットを楽しんで学んでいただきたいものでございます。

725 Q1 先生がおっしゃった「～, でございます。」の回数をすべて数え切ろうと考えていたのですが、そちらに注意を向けすぎると肝心の講義内容が疎かになってしまいそうだったので、途中で諦めてしまった次第、でございます。しかし、少なくとも、100回は使われていたように思われます・・・(略)・・・デカルトのメルセンヌ宛書簡における永遠真理創造説では、「数学的真理(mathématiques)」という語が使われています(本文6058行目, 6062行目)、なぜここで「数学」という語が登場してくるのがよくわかりませんでした。

730 A1 そうで、ございましたか。申し訳ございません。一般に、数学的な真理は、国によって違ふとか、時代によって違ふとかということのないものと思われているので、普遍的に妥当する、変化のない事柄の代表例としてあげられているのではございませんでしょうか。また、フランス語のmathématiques(他のヨーロッパの近代語も同様でございます)は、ラテン語のmathematicaに由来するのでございますが、さらにその元のギリシア語のmathema(ta)は、「数学」という意味の前に、そもそも「学ばれうることから」という意味がございますので、「普遍的に変わらない真理で、人によって学ばれることから」という含みがあるように思われるのでございます。

745 Q2 ... (略) ... カントやヘーゲルの言っている「道具」とは何のことでしょう。最初は普通の意味の道具かと思っていたのですが、読んでいくうちになにかしらの、ある程度確立された? (考えのまとまった) 論かな、と私は感じましたが、...

A2 正確に申しますと、カントが言っているのではなくて、ヘーゲルがカントに対して言っているのです。でございますが、「道具」というのは、「認識能力」のことです、でございます。

750 Q3 デカルト等の近世の哲学者の著作では仏語や独語が古い言葉、つづりで書かれているとの事でしたが、それらの言葉やつづりの変化について参考になる本などありましたら教えていただきたいです。

Q3' 古典仏語を独学で学ぶことができるような、オススメの参考書があれば教えてください。

ドイツ語関係

古賀允洋『中高ドイツ語』（1982, 大学書林）

Bergmann, R., P. Pauly und C. Moulin, *Alt- und Mittelhochdeutsch*, 2004, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

805 Weddige, H., *Mittelhochdeutsch, Eine Einführung*, 2010, München: C. H. Beck.
Götttert, K.-H., *Grundkurs Mittelhochdeutsch*, 2013, Stuttgart: Reclam.

辞書は、Grimmの他、Lexerの3巻本（哲学研究室にございます）、その簡略版の1巻本などがございます。これらはすべて中世のドイツ語（例外的に、近世初頭の初期新高ドイツ語で書いたパラケルス）を読むためのものがございます。

810 しかし、ここで、大切なことをひとつお伝えしておきたいのがございます。それは、ドイツ語とフランス語では、少々、事情が異なるということがございます。と、申しますのも、17世紀には、まだ、ドイツ語は、学術用語として使われるようになっていなかったの、ドイツ人でも、ライプニッツのように、国境をまたいで活動した人の著作は、ほとんどがフランス語とラテン語で書かれていますのでございます。

815 ドイツ語が使われるのは、カントの時代からでございます。ヴォルフなども、ラテン語かドイツ語でございます。ところが、その17世紀のフランス語も、18世紀のドイツ語も綴りが古いだけで、言語としては、現代のフランス語、ドイツ語なのでございます。したがって、綴りが古いことを除けば、基本的に、現代の文法の知識で読めるのでございます。そういうわけで、当時の綴りのままのテキストを現代の綴りに直したテキスト（が大体重要な著作には作られてございます）を参照しながら読めば、分かるのでございます。

Q4 「認識理論のドグマ」というものが、どのようなものであるのかがよくわかりませんでした。

825 A.4 「認識理論のドグマ」というものは、プリント p. 150, l. 6008 にあるニーチェの言葉で、ございますね。「認識論」と「ドグマ」というそれぞれの意味はお分かりで、ございますか。「ドグマ」は、宗教上の教説か、あるいは、（宗教以外でも）独断（的な言い方、考え方）で、ございますから、それぞれの哲学者ごとに、それぞれの「認識」についての理論があれば、それが「認識理論」であり、それを、
830 独断的に主張していれば、「認識理論のドグマ」となるわけでございます。しかし、ある理論を「ドグマ」と受け取るかどうかは、受け止めての方にも、原因があるのでございまして、自分が納得できない仕方で、一方的に「こうだろ！いいか、わかったか！」と言われている感じがすると、どんな「理論」でも「ドグマ」と言いたくなるので、ございます。ここでは、ニーチェが、少なくとも、カント以来、

835 ショーベンハウアーにいたるまでの（ニーチェが知っている）「認識理論」が、ニーチェにとっては、納得できないので、「ドグマ」と言われているので、ございましょう。カントの場合、認識をする主体が自己自身（認識主体）への反省という履行不可能なことを主張しているために、さらに、これに対する批判（メタ批判）を引き起こすことになった、というのが、ニーチェの見るところなので、ございましょう。
840 しかし、カントにしてみれば、明らかに論証や証明を伴って主張しているつもりのことなのかもしれないので、ございますから、「ドグマ」のつもりはなく、「ドグマ」などと言われれば、心外で、ございましょう。一方、ニーチェ自身は、「あるときはこの窓からあるときは他の窓から眺める」というように、「この窓」や「他の窓」というのは、ある哲学者の認識理論による見方のことで、いろいろな哲学者
845 の認識理論による見方（窓）で見てみたが、それらの窓は、どれも見方を押し付けるだけで、自分は納得できないので、「ドグマ」と感じられた、ということで、ご

ざいましょう。こう申してきますと、ニーチェは、哲学の論文らしい文体・用語によってではなく、むしろ、かなり文学的な表現で書いているのに、この説明は、そこに哲学史的な背景を読み込み過ぎている感じがしないでもないので、ございますが、哲学史の研究というものは、このように、「道具」といい、「窓」といい、それらの語としての本来の（第一義的）意味のほか、著者が何を意図して、何を意味するものとして、それを使っているのか、それを、その語が使われている文脈になかで、見抜いて（同定し）、そのような読み方をしていない人たちの誤解を解く（誤読を批判し、正す）、という作業に他ならないので、ございます。

Q5 連続創造説の中では、人の自由意志は無いのだろうか。また、なぜ、不幸な人間や、罪を犯す人も作る（ママ、造る）のだろうか。みんな良い子だと、神は退屈なのだろうか。

A5 たくさんの、根本的な、よい質問で、ございます。どれも、一生かかっても答えられない問題で、ございますので、卒論のテーマとしても、卒論が、何本も書けるほどのテーマでございます。前半は「意志の自由」の問題、後半は、いわゆる弁神論の問題でございます。デカルトは、『省察』の第4部で、広い意味での「思惟」のうちに、意志を認め、私の自由意志は神に比肩できるほど広大（こうだい）であると言っているのです、でございます。で、でございますから、連続創造説でも、意志は保持されることになるので、ございましょう。この場合、考えていただきたいのは、「自由」の意味でございます。単純に、決定論に対するものなのかどうか、質問者がお考えの自由と、デカルトの「自由意志」の「自由」には、ズレがあるかもしれませんから（実際、西洋哲学史では、voluntasという場合と、liberum arbitrium という場合がございます）。また、デカルトの場合は、人間によっては、神ははかり知れないもの、という位置づけでございますから、悪と思われるものを創造したことについて、神を弁護する、という意味での弁神論はあまり必要ないように思われるのでございますが、デカルトの場合、神とは宗教的な意味での神ではなくて、つまり、信仰の対象としての神ではないので、いわば、物事の究極原理を神と呼んでいるだけで、いわゆる「哲学者の神」なので、人間からの連想で、神が退屈するとか、想像してもらっては見当違いなので、ございます。神という呼び方をやめて、究極原理と呼んだ方がよいのかもしれないので、ございます（デカルトの場合）。しかし、デカルト以降、例えば、ライプニッツなどは、長大な弁論を書いているので、悪の存在をどう説明するかは、哲学のテーマであり続けているので、ございます。なお、質問者の「神が退屈する」という発想は、九鬼周造が好んだらしい「遊戯する神」という表現を想起させるので、ございます。これは、デカルトのいう神ではなくて、東洋的な神のような気がするのです、でございます。

自足円満な梵が何故に造化するか。完全解脱の境にある自在神が何故に転変するか、という問いに対して、数論瑜伽説や吠檀多派の哲学が「遊戯のみ」（līlā-kaivalyam）（『吠檀多経』2, 1, 33）または「遊戯のため」（krīḍā-ārtha）（『マーンツークヤ頌』1, 9）と答えた。[『九鬼周造全集』II, 「偶然化の論理」, p. 358]

以上で、ございます。

895 Q.-1 23ページ, 884行目に出てきた「数論瑜伽」説や「吠檀多」派とは、何かの
当て字なのでしょうか・・・

900 A.-1 「数論瑜伽説」は、「するんゆがせつ」と読み、「数論(するん)」が「サー
ンキヤ」学派のことで、「瑜伽(ゆが)」は、ヨーガのことですが、「サーンキヤ」
に限らず、他の学派でも、修行法として、ヨーガを用いるので、学説の内容とは別
に添えられていると思ってください(例えば、唯識瑜伽行派は、修行法として、ヨー
ガを用いる唯識ということでしょう)。また、「吠檀多」学派は「ヴェーダンタ」
学派のことで、「吠」の音は、本来「ハイ」なのですが、慣用で「ベイ」と読むよ
うです。

905 Q.0 …… この授業は、科学哲学だったと思うのですが、この “科学” はどう
いう面を指すのでしょうか？

910 A.0 この授業の最初の頃言及した “science” の日本語訳の問題と関係しますが、
広く、学、学問の意味に解していただき、中でも、現在われわれのいう、自然
科学の側面を、自然の法則という観点から考える、ということでございます。ただ、
915 日本に仏教が伝わったときの、仏教には、宗教としての面だけでなく、人文、社会、
自然にわたる学問知識が含まれていて、現在、我々にとっての仏教とは違って、最
先端の学問の総体であったように、また、古代ギリシアのピロソピアー(哲学、と
訳しますが、知への愛)が、人文、社会、自然のすべてを対象とする当時のすべて
の諸学問の全体であったように、我々にとっての近代自然科学成立以前の、古代、
920 中世を問題にすると、自然科学的な部分だけを取り出す(抽象する)ことは困難で
すし、また、実際の、科学(学問)の営まれ方を部分的にしか見ていないことにな
るのでございます。

Q.1 ホワイトヘッドが、ギリシア型とアレクサンドリア型の学問体系が交互に優勢
になるという状態を考えていたといえるか。

920 Q.1' アテナイとアレクサンドリアの学問のスタイル(?)の違いに興味を持ちまし
た。前者がいわゆる天才型で、後者が優等生型であるとイメージしました。特に気
になったのは、このような学問のスタイルに差ができてきていることです。先生もおっ
しゃったように、全ての人それぞれに型にはまっているわけではないと思いま
したが、このような傾向が生じたのは、風土や政治の影響、受容する側と広めていく
925 (自然に広がったかもしれないですが)側、時代の差など、色々な要因があるの
ではないかと思えます。

930 Q.1' ' 私の専攻する学問分野について考えたとき、かつて(戦前)は、その国家体
制ゆえ、B(学—アレクサンドリア型)の様相を呈していたように思われます。しか
し、戦後はこういった歴史観が見直され・・・かつて研究成果の見直しははかれ、
新たな視点からもさまざまな検討がなされています。

935 A.1 最初に、ホワイトヘッドの表現に忠実にいうと、「アテナイ調」と「アレクサ
ンドリア的」が対になっていて、さらに、「ギリシア型」と「ヘレニズム型」が同
じく対になっているので、ございます(例えば、種山訳, p. 494下段)。以下、質
問者の表現に即して述べますが、本来は、テキストの言い方を注意深く再現するべ
きでございます。… ホワイトヘッドは、地中海世界の古代末期から中世に
かけて、学問の傾向がギリシア型からアレクサンドリア型が優勢になっていること
を指摘しているので、その後、時代や地域、あるいは、学問領域をどうとるかによ

て、交互に優勢になると必ずしも言えないかもしれません。しかし、常に、両方の傾向があるとは言えると思います。Q1'の意見についてで、ございますが、風土や政治などが無関係とは思いますが、学問の内実にとって、外的なこれらの要因よりも、学問の中身自体の問題がより大きな要因なのではないでしょうか。アテナイ型では、Vorsokratiker, Presocratics(ソクラテス以前), ソクラテス, プラトン, アリストテレス, アリストテレス以降(ストア派, エピクロス学派, 新プラトン主義など)と、ほとんど考えられるアイデアが出尽くして、これらを整理して総合し、
940 伝えていくしか仕事がなくなった(というのは言い過ぎでしょう)のが、アレクサンドリア型であるとも、言えるのでございます。アテナイ型とアレクサンドリア型は、数世紀ごとのタイムスパンですが、似たような現象は、もっと短いタイムスパンで、今でも(いつでも)、もう少し細かい領域に限っても起こっているように思うのでございます。例えば、今私が思いうかべるのは、現在(ここ数十年間)の、
950 エンペドクレスのテキスト解釈の傾向とか、ベートーヴェンの創作過程の傾向とか、でございます。Q1'の方が言っておられる分野での研究の傾向もこれに類するもので、この場合は、逆に、アレクサンドリア型から、アテナイ型への移行が感じられるというご指摘でございますね。

955 Q2 私は赤井先生のことをAタイプの皮をかぶったBタイプ、と申しましょうか、と感じておるのでございます。普段の授業ではどちらかというとAタイプが多いように思われますが、本日の授業では、横書きに美しく板書もされ「ほんまはBタイプやん!」と確信させられたのでございます。先生はご自身ではAタイプ、Bタイプのどちらのバランスが大きいとお考えですか?

960 A.2 Cタイプ!と言いたいところ(もう言ってる)でございまして、Cタイプは定義されておりませんので、実際は、きわめて不完全なBタイプというところでございます。「Aタイプの皮をかぶった」というのは、まったく至言でございまして、私には、天才的ひらめきなど少しもございませぬ。研究とは関係ない、音楽の話ですが、最近では忙しくて、まったく手をつけていませんが、作曲と編曲が、AタイプとB
965 タイプを象徴するように思います(どちらも、本人の自発的創作意欲によるか、外から依頼されて、という状況の違いにもよりますし、作曲だけのうちにも、AとBの両方の要素、傾向がありますし、編曲だけを見ても、AとBの両方の要素があるのですが、ここでは、一人の人間のなかでの作曲と編曲を対比してみるののでござい
970 ます)。中学・高校以来、作曲したものより、編曲したものの数のほうが多く、数年前に、某K市のうた、というのを、頼まれて、あるイベントのために、チェロ合奏用に編曲したのが最近作でございました。

975 Q3 ギリシア型、ヘレニズム型というように型にはめて分けているというのは、それこそドクマではないかと思いました。科学を論ずるのであればこそ、少数の例外についても考慮すべきなのではないでしょうか。

980 A.3 まず、「型にはめて分けている」の主語を明示してください。私(赤井)が主語であれば、「例外」が、例外でないもの「規則的なもの」あってこそ、「例外」ですから、例外でないもののほうをまず論じなければ、「例外」も研究の溯上に乗りませぬ。そこで、ホワイトヘッドの指摘する二つのタイプ(アテナイ型とアレクサンドリア型)を他のいろいろな場面に適用できるのかどうかを試して楽しんでいるのでございます。そもそも、大学とか授業とかは、アレクサンドリア型ですから、基本的にドグマ的なことをやっているわけです。次の時代につながって、例学でなくなるものは、例外ではなく、つまり、「規則的なもの」になるわけですから、い

985 つになっても「例外」でありつづけるものは、それをやっている本人にしか意味が
なく、学の対象にならないでしょう。また、もし、ホワイトヘッドが主語であれば、
ホワイトヘッドの論述を、ドクマと受けとるのは、受けとめ手の自由でございます
が、質問者とホワイトヘッドの関心の対象、対象の在り方が違うのでございませ
990 うから。ホワイトヘッド自身は、自分が数学・論理学や物理学の分野で研究にたず
さわりの、当時の最先端の、ある一定の業績をあげたあとで、古代、中世から近現代
にわたって、自然科学の歴史を調べてみて、それぞれの時期に人々が、なぜ、そう
いう発想をしたのかという点に関心をもって、アテナイ型とアレクサンドリア型と
いう傾向があることに気付いたのであって、「ギリシア型、ヘレニズム型というよ
1000 うに型にはめて分けている」のではなくて、ホワイトヘッドには、「ギリシア型」
と「ヘレニズム型」が、向こうの方から、浮かび上がってきたのでございます。こ
995 れ自体は、違見だと思っております。というのは、この見方を他の時代や場面
にも当てはめてみると、うまく説明ができることがあるからでございます（それを、
ドクマと受けとるのは、受けとめ手の自由でございます、と言ったのでございま
す）。なお、ホワイトヘッドも、アテナイでは、全員がアテナイ型だと言っている
のではなく、中には、伝統を守る、アレクサンドリア型というべき人もいるけれど
1000 も、全体としての傾向が、自由な、アテナイ型だと言っているのです。同様に、アレ
クサンドリアにも、アテナイ型の人もいるだろうが、これも、全体としては、アレ
クサンドリア型と言っているのでございます。それらの大きな傾向にとっては、例
外となる人たちについては、個別の科学史研究に任せればよいのであって、それは
1005 ホワイトヘッドの関心ではなく、何故、そういう人が出てきたのか、ということに
関心があるのでございます。いつ、どこで、その時期の学問の状況からすると、例
外的な者がでてきて、その学問分野がどういう方向に変化（進展）していくかには、
予測もできないし、傾向なんていえない、という科学史観（というより、いつ、ど
1010 こで、だれが何をやったとか、言ったとか、ただ、箇条書きの年表しかない）に対
して、ホワイトヘッドは、人類の観念が、時代を超えて、冒険していく物語として
語るができると考えているのではございませぬか（それは、過去の人たちだけ
の物語ではなくて、最後の方には、ホワイトヘッド自身も含まれる物語として
）。

1015 Q4 自然法則とは因果性と同じことだと想像しているのですが、「連続創造説」の
中でどのように自由が可能であるのかがよくわかりませんでした。

A4 「自然法則とは因果性と同じことだと想像している」のだそうでございますが、
全然違います。今回、はじめてこの授業に出たか、まったく、『観念の冒険』を読
んでいないかのようなこととお書きになって、大丈夫でございますか。それとも、
赤井を挑発なさっているのでございますか。閑話休題、ホワイトヘッドがここで言っ
1020 ている自然の法則は、因果性ではありません。もっと具体的に内容のある法則を想
定していると思います。また、「連続創造説」によろうが、「連続」でない「創造
説」によろうが、自由な意志が創造された、ということでデカルトは、意志は自由
だと認めていると言ってよいので、ございます。ポイントは、「連続」かどうかにか
あるのではなく（「連続」だから、意志の「自由」が説明できるとかできないとか
1025 いうことではございませぬ）、「自由」なものとして創造された、ということで議
論はつづいているので、ございます。因果性を、ちょっと乱暴な言い方をすると、い
わば、人間が勝手にそう思っているだけとして、否定している議論としては、有名
な、Humeの*A Treatise Human Nature*のBook I, Part III, Sect. VIの議論があるの

1030 で、まだ、読んでいなければ、読んでおいてください、で、ございます。ホワイト
ヘッドも、箇所を挙げずに、『観念の冒険』で言及していますので、種山先生の訳
注で、指示されています（ p. 519 下段、訳注（1）参照）。ヒュームは原典
（Selby- BiggeとNidditchの版がよろしいと思います）で読んで欲しいのですが、邦
訳で読むなら、木曾先生の訳で読んでください、と申し上げておくので、ございま
す。

1035

1040

1045

1050

1055

1060

1065

1070 Q.0 前回私は自分の専門である歴史学について、アレクサンドリア型からアテナイ型への変遷がみられるような気がする、と述べたのですが、実際にはそのどちらにもピッタリとは当てはまらないような要素、あるいは見方・視点によって、どちらにも該当しうる要素もあるように感じます。

1075 A.0 アレクサンドリア型とかアテナイ型とかいうのが、ある意味で、対象を抽象することですから、なまの対象、もともとの対象全体には、抽象という操作からこぼれて残っている要素があるのでございましょう。そこで、『観念の冒険』の読者は、ホワイトヘッド自身の言葉を思い起こすのでございます。邦訳のp. 537上段に、「自然の法則」についての議論の後で、次の3つの区別に注意を促しています。(1)言語化される以前の、なまの直観、(2)言語化された後の、言語の様式、論証的演繹、(3)演繹的科学、という3つです。
1080 最初の「なまの直観」という表現は、ベルクソンの影響があるように思うのは、私だけでございましょうか。

1085 Q.1 関係・関係項についてはまだ比較的分かり易いと思ったが、先生と同じで、パターンが何を意味するかのかよく分からない。また、499頁下段2行目「自然の秩序というものは～」から、5行目「～というのです」の箇所が特に分からなかった。

A. 1 訳文が英文を忠実に追っているもので、それをたどってたしかめてみましょう。

1090 Q.2 今更になります、が、「自然の法則」の邦訳P.490 (ママ, p.490, くわしくいうと、小文字のピー ピリオッド 半角スペース 490) 上段の1行目に「特殊諸科学」(原文 P.104 (ママ, p. 104) の下から3行目 “The special sciences” とあるのですが、この場合の「特殊」とはどういったことを指すのでしょうか。

A. 2 確かに、今更でございしますが、この「特殊」というのは、ほとんど「個別」というのと同じでございましょう。個々の「～学」ということとございまして。

1095 Q.3 内在説において、「混雑した」状態では事物の相互関係をどのように考えられるか。

1100 A.3 「混雑した」状態というのは、事物の相互関係を考える、認識する側から見て、「混雑した」状態であると見えるのでございますが、しかし、日本語から受ける感じと少し違って、「混雑した」状態だから、法則がない、と決まっているわけではなくて、現在は、見えないけれども、すべて(法則)が入っていて全体として、ごちゃごちゃしているだけである、というニュアンスがあるのでございます。それは(おそらく、中世に由来し)、17世紀には、何にかの哲学者の著作によって確かめることができるのでございますが、例えば、ライプニッツの『形而上学叙説』24にございます。

Q.4 「神は死んだ」と言ったニーチェと、ホワイトヘッドは同時代を共有すると思うので

1105 すが、哲学思想についてはどんな関係にあったのですか？

A.4 関係ありません、と言いたところですが、調べたことがないので、なんとも言えません。ニーチェの生涯は1844年から1900年ですが、最後の10年は生きていただけですから、活動できたのは1889年までとして、ホワイトヘッドのほうは、1861年から1947年ですが、そのうち、1910年まではケンブリッジの数学の講師をしていましたから、ニーチェが数学に関心をもって英語圏の数学関係の文献を読まないかぎり、ホワイトヘッドからニーチェへの影響はなかったと思います。他方、ホワイトヘッドは、ニーチェの著作を読もうと思えば、十分読める時代にいたわけですが、私が知っているかぎりでは（記憶に間違いがなければ）、*Science and Modern World*, *Concept of Nature*, *Adventures of Ideas*, *Modes of Thought*, *Process and Reality*, つまり、ホワイトヘッドの主要な哲学的著作では、ニーチェが言及されることはありません（言及されてなくても、影響があるのかもしれませんが）。また、ホワイトヘッドが明らかに（批判するにせよ、賛同するにせよ）影響を受けているH. Bradleyの*Appearance and Reality*でも、S. Alexanderの*Space, Time and Deity*でも、ニーチェが言及されることはありません。ニーチェの著作・遺稿が話題になるのは、ニーチェの死後、20世紀の前半になってからですが、少なくとも哲学の分野では、「ドイツ哲学の出店」（田中美知太郎先生の言葉）をやっていたら、ありがたがられる日本と違って、イギリス人のホワイトヘッドらには、ニーチェからの積極的影響はないように見受けられます。実際には、もっと言及されているのかもしれませんが、これも私の知るかぎり、ラッセルが、*Our Knowledge of the External World*の最初の方で、古典的伝統派の哲学に反抗した人たちの一例として、ニーチェの名前が1回挙げられている箇所がありますが、内容に立ち入って論じてはしません。英語圏で、ニーチェが取り上げられるとすれば、文学としてか、哲学ならば、いわゆる実存主義の人達によってで、ございましょう。

1130 Q.5 相互関係におけるパターンの同一性が「自然の法則」であるという説が、なぜ「絶対的存在」の否定を含んでいるのか、がよくわかりませんでした。私自身、「パターンの同一性」が一体何のことなのか、よくわかっていないのですが、内在説をとっていても、頑張れば「絶対的存在」を見出せる気がしないでもないのですが、やっぱりダメなのでしょううか。

1135 A.5 逆にお訊ねしたいのですが、何故、「絶対的存在」を見出すために、頑張らなくてはならないのでしょうか。

1140 Q.6 内在説に関して、事物同士がある関係によって法則を有しているとのことでしたが、これは、ある二者（あるいはそれ以上）の共通点でつながっているということ（自然・宇宙・世界には様々な法則がある、ということ）であって、すべての事物が1つの法則を共有している、ということとは違うのでしょうか。

A.6 法則のあり方に、段階を認めるならば、両方あってもよろしかと思います。例えば、

邦訳, p. 500下段～ p. 501 上段で, 「個々の法則」というような言い方で, 訳者が補っているところに従えば, 前者のような法則を考えているようでございますが, どれかでないかならぬような書き方を, ホワイトヘッドはしていないように思われるのでございます。

1145
Q.7 ホワイトヘッドの邦訳テキスト P.501(ママ, p. 501)の上の段の5行目の「これは、「内的関係」について～」の「これ」は説得性のある形而上学説を指していると考えてよいですか。また, この一文でホワイトヘッドが何を示唆したかったのかがよくわかりませんでした。

1150
A.7 「これ」については, それでよろしゅうございましょう。また, 「内的関係 (Internal Relations)」という表現を含むこの箇所は, ここだけ読んでも分からないのが, (専門じゃないので) 当然でございましょう。Internal Relationsは, 『観念の冒険』では, この授業では扱わない後の箇所で, 「外的関係(External Relations)」と対比されて, もう一度だけ出てくるのでございます (原書, p. 157) 。この「外的関係」と「内的関係」の対比は, 見る人によっては (分からない人にとっては) , 同じ事を正反対の違う表現で言っているようにも見えるのでございますが, 『過程と実在』でも, 取り上げられる重要な区別でございまして。そこでは, デカルト, ニュートンらの「外的関係」に対して, ホワイトヘッド自身の立場としての「内的関係」という見方が述べられるので, 授業では, 1155
1160
これについて, 私の理解する限りで (ですので, 心もとないと思うのでございますが) , 少々, 説明いたしましょう。

1165

1170

1175

1180

Q.0 先生が紹介された長尾龍一著の『純粹雑学』の出版社はどこでしょうか。

A.0 ちょっとお待ちください。今、見てみます。ええっと、信山社、でございます。初版1998年、ISBN4-7972-5102-6、でございます。装帧は？と、ええ～。あの、石川九揚、だったとは。なるほどお～、でございます。

1185

Q.1 ……「混雑した」状態というのは、法則が内含されているが、秩序ある形になってはいないというようなものであるとのことでしたが、そのような状態にあって何故法則がある（含まれている）と言えるのかが気になりました。内在説における「混雑した」状態だから、そう言えるということなのでしょう。

1190

A.1 はっきり言って、全然、違います。「混雑した」状態、という表現は、認識する側の問題であって、認識される対象（世界、宇宙）のあり方そのものではないのです。従って、「法則が内含されているが、秩序ある形になってはいない」という言い方はマズイです。confusedは、confususに由来するのでしょうか。もとの動詞としてのconfundoの意味は、「いっしょにする、ひとつにする」で、ここから、「混ぜ合わせる」「混乱させる」などの意味がでてくるのでございませうが、いっしょにされていても、入っているはずのものは、入っている、というのが前提で言われているのでございます。それが、認識する側の能力の問題で、ただ、区別して見えていないだけなのでございます。ですから、日本語の「混雑した」とか「混乱した」という訳語は、ある意味で、非常にマズイのでございます。

1195

1200

Q.2 認識の種類が、あいまいなもの、明せきなものと分かれ、明せきなものが、混雑なもの、判明なものに分かれるということでしたが、混雑なもの、というのが何となく分かったような気もしますが、少し分かりづらかったです。

A.2 Q.1と同じ「混雑した」ということに関してですが、「混雑した」という直訳的な言い方よりも、「判明な」の対として、「判明でない」と言うほうが誤解をまねかないのかもしれない。なお、「混雑なもの」というのは「混雑したもの」というほうが適切でございませう。

1205

Q.3 「外的関係」と「内的関係」のような捉えられ方の違いは、時代的なものが原因なのでしょう。

1210

A.3 そうとも、言えないと思います。確かに、17世紀のデカルト、ニュートンらに対して、19～20世紀のホワイトヘッドという時代の違いはありますが、古代でも、デモクリトスらの原子論に対して、プラトンやアリストテレスが、違う捉え方をしています。

1215

Q.4 A.4（ニーチェとホワイトヘッド）に関して、先生は「全く関係がないということを経明することは難しい」とおっしゃっていました。確かにその通りであると思います。自分

1220 で調べ切ったつもりでも、急にその事象に関わる文献が出てくることがあるからでございます。しかし、一方で、「あることが、明らかにほかのこの原因になっているかどうかを証明するのは難しい」（国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能 ---OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2009年調査国際結果報告書---』明石書店、2010年、77 - 83頁、「携帯電話の安全性に関する問2」）という意見もあります。この点に関して先生はどうお考えでしょうか。

1225 A.4 「証明」の意味をどう解するかと、「原因」とされる事象と「結果」とされる事象の関係を、どういう見方（学問領域に固有な方法）によって捉えるかによって話が変わると思うのでございます。と、申しますのも、「風が吹けば、桶屋が儲かる」という場合、これは、人間社会にかかわる（広い意味で、経済学）学問領域の考察対象であると思われま
1230 すが、「風が吹く」こととから、「桶屋が儲かる」までの一連の出来事をすぐに思い受か
べることができる人にとっては、その説明は、何らかの説得力があるでしょうが、そうで
ない人にとっては、「風が吹く」ことが原因で、「桶屋が儲かる」というのが結果である
1235 と言われても、納得がいかないはずで。また、「夕焼けが美しい日の翌日は天気が良い」
という場合は、気象学の考察対象であると思いますが、「夕焼けが美しい」という気象条
件が原因となって、「翌日は天気が良い」ことが引き続いて起こることを説明できれば、
一定の説得力をもつでしょうが、いずれの場合も、説明者が見落としている条件があるか
もしれないのでございます。それは、ひとつには、前提から厳密な演繹推論が行なわれて
1240 いるかどうかにもかかっているのでございます。しかし、学問分野（領域学、個別学、特
殊学）を限定しないと、一般的には、ある事象と別のある事象について、一方を原因、他
方を結果として認識するかどうかは、きわめて人為的な、主観的なことなのでございま
す。この点で、やはり、ヒュームによる因果性否定の議論は、参照するべきなのでございま
す。

1240 Q.5 時代によっては、宗教の影響力を考慮しつつ、自己の思想を表現しなければ、社会に
おける立場がなくなることもあり得るので、実際の思想と出版される際の内容の差異は大
きいのではないかと思いました。

1245 A.5 そうでございますね。言語による、直接的な何らかの思想の表現を伴わない、という
意味で抽象的な、音楽（器楽曲）の場合でさえ、スターリンのソ連のもとでは、ショスタ
コーヴィッチは、政治的な支配者の機嫌を損ねないような作曲を強いられたのでございま
すから、言語による表現を主とする領域では、なおさらでございます。

1250

1255 Q.0 ウィトゲンシュタインの数列問題！私の中でヒュームとウィトゲンシュタインが一つの線で接続されました。感動しました。

A.0 なんだかよくわかりませんが、天隆という店へ行って、そばを注文し、レモンを搾って入れ、おいしくいただき、そばとレモンが一つの線で接続されて、私も感動しました。

1260 Q.1 (ヒュームについて)「恒常的随伴」というのは、一定で変わらずに常についてくるものであるという感じで考えても良いのか気になりました。

Q.1' . . . 「恒常的随伴」と聞いて、なぜかチャーマーズを思い出しました。以上、感想でございます。

1265 A.1 それでよいのでございますが、「一定で変わらずに常に」というのが、持続的、継続的ということではなくて、Aという事象が起これば、直後に、常に、Bという事象が起こる、というように理解していただきたいのでございます。また、チャーマーズといえば、クオリアでございますが、確かに、言葉で完全には説明しがたい意識や印象の内容やそれら相互の関係を隔靴搔痒という感じで語るときに、ある印象に「恒常的」に「随伴」する別の印象、などと言いきうでございますね(実際、言っているかどうかは確かめなければなりません)。

1275 Q.2 私たちは言語(記号や公式なども含む)を共有することで暗黙のお約束の世界で生きていて、大半の人たちは、それに何の疑いも持たずに、何不自由なく生活している。汎(ママ、凡)夫は神が賦課された法則に従順に生きていてだけで、哲学者は、そのことに疑問を持ち、絶対的であった幾何学や台数を根底からくつがえすような変人であるということでしょうか？

1280 A.2 ホワイトヘッドが、『過程と実在』でとっている立場は、或る事象を見たり理解したり、あるいは認識したりするとき、認識する主体は、あらかじめ、その主体がもっている認識装置(ものさし、というか、いろめがね、というか、あるいは、認識の枠組み、
1285 カントでいえば、時間空間とカテゴリーのようなもの)によつてしか、その或る事象を見ることができない、ということと(そういう認識装置で、対象を捉えることを「切り取り(cutting-off)」とか、「把握(prehension)」とか言うのでございます)、最終的には、なんとかして(どうしてできるのか私は、まだわかりませんのでございますが)、その認識される対象(=或る事象)に対する認識主体を消してしまうことなのだと思うのですが、
前半で述べた認識する主体があるかぎりには、その認識する主体のもっている認識装置にも、
いろいろあって、人によって異なる、ということに起因して、その変人もいるのではないのでしょうか。

Q.3 授業のテキスト含め、ホワイトヘッドの著作を少し読みましたが、その思想のスケー

1290 ルの大きさというか、めっちゃすごいなと思いました。私が今まで知らなかっただけなの
もありますが、日本でホワイトヘッドがマイナー？な感じがしてならないです。

A.3 日本には、プロセス学会という、ホワイトヘッドの有機体の哲学を研究する人たちの
学会がありますし、私が授業を受けた先生（平林先生）、大学院のときの先輩、そして、
1295 同学年に1人と、これら3人は、大学の先生になっていますが、今いる哲学の分野でも、
過去に、院生の修論で1人(*The Concept of Nature*)、学部の卒論で、アレクザンダーとの
関係でホワイトヘッド(*Science and Modern World*)も扱ったのが1人とけっこうホワイト
1300 ヘッディアン(?)がいます。「わが国の哲学の状況も、ドイツ哲学の出店のようなもの」
（「哲学とその根本問題」、『哲学入門』所収、講談社学術文庫、p. 151）とは、田
中美知太郎先生のお言葉でございますが、広島大学の哲学・思想系のスタッフのことを考
えると、質問者がそうおっしゃるのも、無理もございません。

Q.4 501頁下段1～3行目、なぜ究極的構成要素たる存在者は自然の他の究極的構成要素
と関係を結ぶ事を必然的に課せられているのか。また、関係のために関係項の本性を発見
1305 する、あるいはその逆を、する必要があるのだろうか、当然と言えば当然な気もする
が。 . .

A.4 よい質問でございます。これは、賦課説、それも、デカルトの『哲学原理』で表明さ
れている実体概念を前提としているので、ございます。邦訳の503頁の訳注(1)および
(2)をお読みくださいませ。ただし、訳注(2)で指示されている、『哲学原理』第1部第
1310 53節というのは、『哲学原理』第1部第51節が正しいのでございますが。 . .

1310

1315

1320

1325

1330 Q.0 . . . ホワイトヘッドの『観念の冒険』を読んでいて思ったのですが、ホワイトヘッドはプラトンやデカルト、ニュートンなどの過去の哲学者の考えなどをよく引用している気がします。このように過去の哲学者の思想を踏まえつつ新たな思想を展開（学問的？）するのが、いつ頃から盛んになっていったのかが、気になりました。

1335 A.0 よい質問です。すでに、紀元前4世紀のアリストテレスが『形而上学』A巻（第1巻の意味）で、最初の哲学者と目されるタレースから、自分の師匠であるプラトンまでの哲学を振り返って批判を加え（最初の哲学的的記述）、それらを踏まえて、自分の考えを展開しています。E. コセリウ／田中克彦訳『言語変化という問題』（岩波文庫、2014）に寄せた、解説の中で、エマ・タマヤヌ・モリタがコセリウの学問的態度を説明して、次のように言っているのが参考になります。

1340 1977年のインタビューの席で、本書の原書を読んだフランス人言語学者が、「重要だが、古い」と批評したコメントに対して、コセリウは「古いが、重要だと言うべきだった」と皮肉をこめた反論のこぼれを残しています。人文科学の特徴からすれば、古いかどうかは問題ではなく、真理に至っているならば、古くてもその価値が損なわれることはないという根本的な理解が出来ていない不見識さを指摘したわけ
1345 けです。反対に、自然科学の分野では、技術革新に伴う新しい発見によって、時代とともに発展していくものです。過去の発見や知見は科学史という歴史の出来事として記録されるに過ぎません。しかし、たとえば哲学を例にとると、現在でもソクラテス、プラトン、アリストテレスが残した論考を学ぶことから始め、その価値は決して過去のものではなく、現在でも変わることはない重要性を持っています。
1350 コセリウは、こぼれを研究する上で、常にこの観点を貫きました。（E. コセリウ／田中克彦訳『言語変化という問題』、pp. 417 - 418.）

ここで、表明されている考え方は、大枠において正しいと思いますが、しかし、自然科学においても、同じく、「古いかどうかは問題ではなく、真理に至っている」かどうか、
1355 問題であるはずですが。実際には、より新しい実験や観察に基づいて検証された理論（仮説）が正しいとされるわけですが、17世紀のボイルやデカルトなども、この世界を構成する物質はより少数の粒子からなると考えていたのが、18-19世紀のドルトン、19世紀のファラデーになると、複数の元素を実験的に確かめて、これが化学で学ぶ元素の周期表のような数になるのですが、しかし、20世紀になると、それぞれの元素がまた、原子核や電子と
1360 いう少数のものからなることが認められ、17世紀の人達が考えたようなものではないにしろ、再び、より少数の粒子からなる世界観に戻りました。その後は、また、さらに素粒子の研究へと続いていくことになります。ここでも、古いかどうかではなくて、その時々にも最も合理的と考えられる方法によって、検証されるかどうかの問題なのでしょう。哲学は、

そういう実験や観察という方法では、原理的に検証できない事柄を主に扱っているのです。

1365

Q.1 法則が課せられる以前は、何故、無秩序であると考えられていたのでしょうか。神が不在であったからでしょうか。しかし、神が「不在」であるということはありませんか。

1370

A.1 これも、よい質問です。賦課説に必要な、法則を賦課するもの（この場合は、神）を、例えば、ヘブライ・キリスト教の神を認める立場から見ると、それを外部から、第三者的に見る立場を区別して論じる必要があります。まず、賦課説（ヘブライ・キリスト教の神を認める）立場からすると、神が（法則のある）世界を創造する以前、ということが言えるとなると、そこには神だけがあり、世界はなかったもので、無秩序もないということになるでしょう。そもそも、秩序とか無秩序というのは、世界について言われるとすると、1375 その世界そのものがないのですから、秩序も無秩序もありません。また、（ホワイトヘッドのように）賦課説を外からみると、内在説との比較が可能です。内在説のように、特権的な存在者がいない世界が、法則のある秩序ある世界でありつづけるための「何らかの安定した現実存在」（邦訳； p. 504下段）の必要性が感じられ、それが、賦課説の神と重ねて考えられるおそれがあります（内在説と賦課説の間をゆれうごくプラトン、邦訳、p. 1380 512上段）が、賦課説の立場からすると、それはありえないことです（内在説でも徹底した内在説ならば、ないはずです）。そこで、逆に質問ですが、「法則が課せられる以前は、何故、無秩序であると考えられていた」というのは、どこにある記述ですか。また、どの立場からの発言に分類されるのでしょうか。

1385

Q.1+ 天隆の詳しい場所が知りたいです。

A.1+ Google Mapで見つけてください。67号線を呉 に向かって、コンビニの前で左折です。

Q.2 ホワイトヘッド自身は自然法則の考え方について、どの説が一番近いのですか。

1390

A.2 どれでもないと思います。しかし、これも、答えるのが難しいという意味で、よい質問です。『観念の冒険』だけを読むと、単に人為的な取り決めではなく、實在に何らかの根拠をもった（というと、形容矛盾のようですが）規約説に近いのではないかと思われるかもしれません。しかし、『過程と実在』では、神について語っているのですが、字面だけ見ると、ヘーゲルみみたいな矛盾だらけの論理的にはわけのわからんことを言っていて、1395 これがああラッセルと『プリンキピア・マテマティカ』を書いた人だとは思えない程です。これは、ひょっとすると、ヘーゲリアンのブラッドリーや、独自の宇宙論を展開したアレグザンダーを通じての、ヘーゲルの悪い？影響かもしれません。

1400

神が永続的で世界が流動的であると言うのは、世界が永続的で神が流動的であると言うのと同じく真なのである。

神が一で世界が多であると言うのは、世界が一で神が多であると言うのと同じく真なのである。

世界と比較すれば、神が卓越的に現実的であると言うのは、神と比較すれば、世界が卓越的に現実的であるということと同じく真である。

1405 神が世界に内在すると言うのは、世界が神に内在するということと同じく真である。
神が世界を超越すると言うのは、世界が神を超越するということと同じく真である。
神が世界を創造すると言うのは、世界が神を創造するということと同じく真である。
[ホワイトヘッド／平林康之訳『過程と實在』, p. 511]

1410 という調子で、最後に、

時間的な被造物 Creature の各々の生命における消滅する諸生起のいたるところにみられる、嫌悪ないし気分爽快の内奥の源、事物の真の本性から生じてくる審判者、救済者ないし災いの女神、それは、神の存在 the Being of God のうちに永続している[その被造物]それ自身 Itself の変換なのである。

1415 [ホワイトヘッド／平林康之訳『過程と實在』, p. 512]

となつて、一見、世界と神は同一、いや、神が世界と同一、という汎神論のようでもあり、しかし、『過程と實在』では、ここに至るまでの議論があるので、そう簡単に片付けることはできません。これを理解するためのヒントのひとつが、『観念の冒険』で示される「自然の法則」の4つの立場なのですが、ホワイトヘッド自身は、その4つのどれでもない、とうことだけは言えると思います。しかし、具体的にどういう立場なのか（「有機体の哲学」と本人は言っています）、専門じゃないので、わかりませんが、今後の課題とさせていただきます（たぶん、自然の法則という観点からは何も言っていないと思うので、「有機体の哲学」の立場から推測するしかないと思います）。

1425

1430

1435

1440 Q.0 赤井先生は修士論文や博士論文は何語で書かれましたか。

A.0 大学院入試の口述試験のときに、先生から「修論は日本語で書いてください」と言われて、これは受かった、と思いました。もちろん、修論は日本語で書きました。博論も日本語で書きましたが、博論は、それまでに書いていた、いくつもの論文をまとめて多少手を加えたものですが、もとの論文のうち2つは最初から英語で書いたものなので（もとの日本語というのがない）、自分で書いた英語を、なんか変な英語、と思いながら日本語に訳しました。

1450 Q.1 同じ出来事を、観察し、記述する場合に、個人の教養に左右されるだけでなく、言語の持つニュアンスなどの違いもおおいにあると思います。その言語を更に別の言語へと翻訳していくと、より以上の違いの生ずると思われ、原典を読むことの大切さをあらためて痛感しました。

A.1 別の授業で示したことのある例でいうと、ある本に、次のように書かれています。

1455 このように、アリストテレス倫理学は、人がいかに行為すべきかだけでなく、行為への性格付けに基づいて、つまり「まったく規定された、確固たる根本姿勢に基づいて」、そのように行為する人であり得るかをも主題にする(NE 1137a; Kosman 1980, 103)。[謀書, p. ??]

1460 この「」内は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』(1137a8-9)からの引用なのですが、もとのギリシア語をドイツ語訳したものを、さらに日本語に訳した重訳なのです。もとのギリシア語と、日本語訳、英訳、フランス語訳、イタリア語訳、ドイツ語訳をいくつか示すと、次のようになります。先の引用は、一番最後の、Dirlmeierが、ドイツ語へかなり意識したものを、意識と知ってか知らずか、日本語へ直訳したものと思われる。

1465 τὸ ὡδὶ ἔχοντας ταῦτα ποιεῖν [Arist. *EN*, V, 9 (XIII), 1137a8-9]
これこれの一定の状態にある人たちが、そうあることによって、それらをなすこと
(拙訳)

「かくかくの状態(ヘクシス)にあることによってそれに基づく行為をなす」ということ(高田三郎訳, 岩波文庫, 上, 206ページ)

1470 自分自身がそういう性質のものであるためにそのようなことをする(加藤信朗訳, 全集13, p. 175)

to do these things as a result of a certain state of character [Ross, *The World's Classics*版, p. 131]

to do them as a result of a certain disposition of mind [Rackham, Loeb, p. 311]

- 1475 faire tout cela en vertu de telle disposition déterminée du caractère [Tricot, p. 264]
le faire avec telle disposition intérieure [Jolif, p.151]
il fare queste cose coi sentimenti convenienti [Plebe, *Opere*, 3 vol., p. 573]
aus einem festen Habitus heraus so zu handeln [Rolfes, PhB, S. 111]
1480 man es in dieser bestimmten Gesinnung tut [Gohlke, S. 149]
so handeln auf Grund einer ganz bestimmten, festen Grundhaltung [Dirmeier, Akademie版, S. 117; Reclam 版, S. 147]

ギリシア語のhechontasは、動詞echoの現在分詞・男性・複数・対格なので、上記のよう
1485 に、「これこれの一定の状態にある人たち」という意味ですが、この動詞echoから、
hexis (ヘクシス・習得態・習態・所有態) という名詞が派生するので、「ヘクシス」と言
えばすぐにそれとわかりますが、「まったく規定された、確固たる根本姿勢」と言われて
も、ピンときません。明治の初期にまだ、ギリシア語を読める日本人がいなかったころ、
英語訳やドイツ語訳されたアリストテレスの著作を読んで、それを日本語にするというこ
1490 とはよく行なわれましたが、現在では、ギリシア語のテキストが手に入り、ギリシア語か
ら直接訳された日本語訳も何種類も存在するのに、なぜ、こんな重訳をするのでしょうか。
「まったくドイツ語に規定された確固たるドイツ至上主義の根本姿勢」は、哲学の精神か
らはもっとも遠いところにあると言わざるを得ません。ここまできると、哀れを通り越して、
滑稽でさえありますが、こういう人を先生とする学生が(このことに気付いていなか
1495 れば仕合せですが) かわいそうです。若いうちから、ギリシア語とラテン語をやっておか
なければ、学問としての哲学はできない、という一例です。

Q.2 「実証主義の派」に関して、先生の、同じ事物についての観察でも、それを観察す
る人の視点によって結論が変わることはあるのではないか、というご指摘になるほどと思
1500 いました。ホワイトヘッドはここではこの点をあまり問題にしていますが、人によって
視点が違うからこそ論争が生まれ、観察されたものに対する解釈が深まるとするならば(熟
知が前提なので矛盾しているような気もしますが)、それこそが学問のおもしろさではな
いだろうか、と感じました。

A.2 ホワイトヘッドからすれば、同じ「実証主義」あるいは「記述説」になるであろう、
1505 原子論にしても、デモクリトス・レウキッポスとエピクロス・ルクレティウスでは、違
うところがありますし(この違いが、マルクスの最初の論文の研究テーマでした)、ヨーロ
ッパの近代原子論になると、また違いがあるでしょう。このそれぞれが、それぞれの考
え方に即した説明をして世界を捉えようとしているわけです。それに、実は、この原子論とも
いうべきものは、インド(例えば、ヴァイシエーシカ学派)にもイスラーム(例えば、ア
1510 シュアリー学派やムータジラ学派)の世界にもいろいろなタイプがあるので、原子論は、
ヨーロッパの専売特許ではありません(私は、中国のことが一番不勉強で何とも恥ずかしい
かぎりです)。日本人で、西洋のことを専門に勉強している人の中には、あまりにも、イ

ンドやイスラームのこの関心がないというか無知で、哀れを通り越して、滑稽でさえあります。そして、19世紀末のヨーロッパでは、原子論の仮説をめぐって、エネルギーとアトミスティックの論争がありました。エネルギーは、オストワルトに代表される現象論者で、アトミスティックは、ボルツマンに代表される原子論者ですが、当時は直接観察できなかった原子や分子を実証（検証？）できないからという理由で認めなかった、エネルギーは、結局、アトミスティックの仮説が正しいことを認めることになります。つまり、それぞれの立場によって、同じ事象に関しても、自分の立場にとって実証的で合理的と思われる説明や理論が、異なっているということです。

Q.3 「科学」も一つの宗教である、という考えがあります。たしかに一見人間中心主義に思える科学ですが、その根拠なりは全て観察する人間の外側（自然、世界）にあり、またある自然法則がなぜ存在するのか、は人間のはかり知りえるものではないですよね。その構造は宗教・神の存在に似ていると思います。先生は上記の考えについてどう思いますか？

A.3 「科学」と「宗教」の定義次第だと思います。それは、質問者の表現を使えば、「人間のはかり知りえるものではない」もの・ことをどのように位置づけるか次第でしょう。学問として扱わないで、真なるもの・こととして信じる部分をもつかどうか、という点に違いを認めるとすれば、「科学」は「宗教」ではない、と言えるでしょう。しかし、これはもっと難しい問題を含んでいるので、例えば、トマス・アクィナスの『神学大全』第1部第1問題第2項の「信」と「知」の関係を考慮すると、もっと慎重に言わなければならないかもしれません。

Q.4 記述説が魅力的であるというのは、観察された事象をそのまま記述することによって法則を見出すことには疑わしきことが生じないから、つまり、説（ママ、誤？）まりをおかず可能性が少ない（無い？）から、ということでしょうか。観察された事象の記述を続けるだけで法則と呼ぶにふさわしいものが見出されるのか。観察結果（特殊）から法則（普遍）を見出すためには、観察された事物についてのみ語るだけでなく、それ以上の何事も語る必要があるのではないか。帰納的推論のようなものが必要なのではないか。もしそうならば、そこに誤謬推理の可能性もあると思う。

A.4 質問者が「帰納的推論のようなもの」と言っているのは、Q.2の質問者のいう「視点」と重なる部分があると思います。「観察された事象」を記述する、といっても、記述するための装置・道具（概念・理論など）が必要ですから、それが一通りではなく、同じ事象に関しても何通りかの記述が可能場合があります。A.2で言及した、エネルギーとアトミスティックの論争などは、これにあたるでしょう。つまり、あらかじめ、記述する者がもっている、あるいは想定している法則のようなものがあるだろう（帰納推理というとき、これが問題になるはずです）、ということです。

1550 Q.5 記述説は、確かに単純なようではあるけれども、理解するのが簡単というわけでは
なさそうだと思います。「スコラ学者」自身の間でも、意見はそれぞれひじょうに違っ
ているというのが、当たり前ではあると思いましたが、同時におもしろいとも思いました。

「アリストテレス論理学」が浅はかな武器だったというのがわかりにくかったです。アリ
ストテレス論理学によって様々な命題が背景にひそめられていたというのが問題だったと
1555 という理解で良いのでしょうか。実際にアリストテレスの論理学について学べば何かわかる
かもしれないので少し見てもよいかとも思いました。

A.5 是非そうしてください。形式論理学としては、アリストテレスの時点でほとんど完
成しているので、（中世論理学をよく知らなかった）カントが「論理学はアリストテレス
以来進歩も退歩もしなかった」（*K.d.r.V. BVIII*）と言っているほどです。ラッセルと『ブ
1560 リンキピア・マテマティカ』を著したホワイトヘッドですが、時期的に、中世論理学につ
いての研究成果を知り得なかったのが残念です（知っていれば、もう少し違う評価になっ
たのではないかと、思います）。

1565

1570

1575

1580

1585

1590 Q0 今回(第13回)のQ3に対する用語の定義ですが, 論文を執筆する際に, 指導教官(今では, 指導教員では?)の先生から, 言葉の持つ意味(定義)に注意するようアドバイスを頂いたのを思い出しました。言葉の持つ意味は人によって捉え方が大きく異なってくる場合もあるので, 今後も注意して言葉の選択, 定義の限定をしたいと思います。先生は焼き肉によく行くのですか。

1595 A.0 言葉の定義を意識してまもることは, 学術論文を書く条件でしょう。さて, 焼き肉ですが, 以前は, よく行ったのですが, 最近は全然行っていません。

1600 Q.1 知と信については納得できた。神の存在を信じることを賭けだと表現したパスカルを思い出した。信じるためには対象を知らないことが必要かもしれないが, 全く無知であるとは言えないと思う。対象への無知, 但し, 少しは知っているというのが, 信じるために必要だと思う。

1605 A.1 よい質問です。というのは, この問題は, 古代でもすでに指摘されていますが(だいたい, こういう昔から言われる問題は, よい問題だから, 繰り返し問われるのでしょう), プラトンの『メノン』と, それにも言及しているアリストテレスの『分析論後書』の指摘が参考になるでしょう。信であれ, 知であれ, その内容があるはずですから, その, 何らかの内容については, アリストテレスが, (信ではありませんが) エピステーメーについて言っていることがあてはまると思います。つまり, *ei esti* (それが有るかどうか) と *ti est* (それが何であるか) を区別した上で, 現実態(完全にすでにわかっているものとして)においてではなくて, 可能態(不完全だが何か部分的にわかっているものとして)において知られている, ということです。

1610 Q.2 コメントの「若いうちから, ギリシア語とラテン語をやっておかなければ, 学問としての哲学はできない」という部分になるほどと思いました。他の学問にも言えると思いますが, 語学力は必要なものだと感じました。プラトンの説が, 賦課説とも内在説ともとれるようなものであったのが, ややくしく感じました。「法則」に関して, 4つの説が出てきました, 1つ1つの説が完璧であるわけではないのだと改めて感じました。

1615 A.2 外国語の読解力にかぎらず, それぞれの研究対象に応じて, それを扱うための道具というものが必要である, ということは言えるでしょう。また, ホワイトヘッドが述べている四つの自然の法則の考え方は, もともと, 一つの判断基準で排他的に区別されたものではなく, 四つのどれもが, 長所短所をもっている, といえるでしょう。

1620 Q.3 「観察される」「見られる」ことで対象は変化しており静止しない, というのが興味深かったです。「観察する」「見る」という作用を受けた対象が変化する限りでは, 対象の「観察されていない」状態, 「見られていない」状態は観察できないのでしょうか。ま

た、観察できない概念についても、認識される事で変化が生じるのでしょうか。

1625 A.3 「観察する」も「見る」も「認識する」もすべて、その対象に対しての何らかの「はたらきかけ」ですから、おっしゃるところの「概念」も「認識される（はたらきかけられる）」ことで、何らかの変化を被っている、ということで、ございます。

1630 Q.4 プラトンの存在論の話聞いて、クワインが「『何もない』が存在する」という問題（正確に何と書かれていたかは思い出せませんが）を「プラトンのひげ」と呼んでいたことを思い出しました。「何もない」ことを私たちが観察できる（「動」である）から存在しているということなのでしょうか。

A.4 オッカムのカミソリよりもプラトンのひげのほうがかたい、という話ですね。Quine, W. van O., 1953, *From a Logical Point of View*, Cambridge, M.: Harvard Univ. Press. の中の第1章, On what there is, pp. 1 - 2 で言われています（日本語訳も複数あります。中山・持丸訳『論理的観点から』, 飯田隆訳『論理的観点から』）。クワインは、プラトンにかこつけて、Nonbeing（非存在）の存在自体を問題にしていますから、やっかいです（ですから、名詞で表現できるが、現実には自然界に存在しないと考えられるペガサスとか、普遍を問題にしています）が、Q.4の質問者は、「「何もない」こと」と言ってくれていますから、何も問題はなく、ホワイトヘッドが言及するプラトンの『ソピステス』に従って、「「何もない」こと」つまり、「「何もないという事態」がある、ということになるでしょう。

1645 Q.5 レポート提出についてですが、もし2/13に間に合わなかったら、先生にご連絡すればよろしいですか？

A.5 2月20日が成績の入力期限のはずなので、それまでに赤井がレポートを読んで評価できるように、連絡した上で、提出してください。

1650 Q.6 講義についてはとくにないのですが、「哀を通り越して滑稽（笑える）」というのは全世界共通なのでしょうか。

A.6 全世界の人々に共通しているかどうかは、わかりませんが、自分が、哀れに思ったり、悲しんだり、怒ったりしているうちは、まだ、自分とその感情の対象とに何らかの一体感というか、自分の一部であると感じがしますが、滑稽で、笑える、というのは、その対象あるいは、その対象をとりまく状況を、自分から突き放して（あるいは、自分をも対象として、といえるかもしれませんが）、笑いの対象とする、という感じがします。しかし、1655 すぐに思いつくところでは、ニーチェが『善悪の彼岸』204で、「全近代哲学が次第に零落したその成りのはてである現代哲学というこの残滓は、嘲笑(Spott)や憐憫(Mitleiden)を誘わないまでも、不信と不満を呼びおこすものとなっている」（信太正三訳）と順序を逆にして並列されています。

1660

Q.7 長らく授業を休んでしまい申し訳ないです。年末、体調を崩していたため中間レポートを提出できていませんが、ちゃんと提出しようと思いますので、評価の程よろしく願います。

1665 A.7 毎回の授業での（このQ.& A.による）やり取りは、下記のURLにpdfでアップロードしてありますから、読んで参考にしてください。

home.hiroshima-u.ac.jp/akyah59/lectures_index.shtml

1670 Q.8 科学と宗教の関係のお話しは大変興味深かったです。ホワイトヘッドの本を3冊ぐらいいかりてみたので、レポートががんばりたいです。

A.8 がんばってください。

1675 Q.9 以前、倫理学の授業で、「信じる」「考える」「知る」などについて考えたことがありました。私を含めて多くの学生が同じような意見を出しました。「信じる」とは、疑わないこと、つまり考えることを放棄した状態で全て委ねて、むしろ自分の希望を込めた心理状態である。それが信仰につながる。「考える」とは疑問を持つことに始まり、色々な方法をもってして「知」るための過程である。というような結論になったのですが、とても興味深く思いました。是非トマス・アキナスの『神学大全』を読んでみようと思います。

1680 A.9 そうでございましたか。トマスについては、後のQ.11と資料もご覧下さいませ。

Q.10 ルクレティウスの原子論について、「降り注ぐ」とするのと「流れ」とするのではかなり変わってくるように思われるが、どのような解釈の差異があるのか。

1685 A.10 これに関して紹介するべきは、ミッシェル・セール／豊田彰訳『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』（1996年、叢書・ユニベルシタス 546、法政大学出版局）でございました。宣伝文句によると、「古今東西の最高の哲学詩にして古代原子論の最も系統的な叙述とされるルクレティウスの『事物の本性について』を流体の力学＝物理学の書として読み解き、カオスや偶然性を対象とする原子論を現代科学の目で再評価しつつ、もうひとつの科学＝知の可能性をさぐる」のだそうでございます。セールは、パリ大学（第一）の科学史の教授で、学位論文はライブニッツに関するもののようです。この原書(Serres, M., 1977, *La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce*, Paris : Minuit.)は、1977年に出ています。さて、セールによるルクレティウスの読み方のポイントは、従来の「原子の（上から下への）落下（降り注ぐ）」のイメージで、読むと、なぜ、原子はまっすぐ落下しないで、傾く（クリナーメン）ことがあるのかが、疑問になる

1695 けれども、河川の流れを見ればよく見られるように、流れは直線的で一様ではなく、渦の形成があるから、ルクレティウスが言っているのも、水の流れをイメージすれば、「原子が傾いて流れる」ということに疑問がわからない、というのです。ここから、セールは、ル

クレティウスを流体力学の書として読み解く、というわけで、ございます。確かに、テキストの随所に、この「流れ」という読み方をすれば、自然に読めるところがございます。

1700 ルクレティウスが流体力学を論じていたかどうかは私にはわかりませんが、テキストのイメージの読み方としては、優れていると思うのでございます。

Q11 ホワイトヘッドが取り上げた、アリストテレスの神は不動の動者であるという表現は、私も気に入ってしまいました。一方で、プラトンの、動いていなくても観察されてい
1705 ればそれは「動」である、という主張はわかるようなわからないような、個人的には何とも評価しがたい印象を受けました。また、現代の我々がとらえる「知ること」と「信じること」、とトマス・アキナスが『神学大全』で述べるところの「知」と「信」は異なっているという点、大変興味深かったです。確かにトマスの主張に即せば、科学≠宗教であるという根拠になり得ると思いますが、まだトマスの主張に納得できていないので、時間
1710 があればゆっくり読んでみたいです。やはり「言語の壁」（とでも言うのでしょうか）は厚い気がしました。

A.11 前半のプラトンの（アリストテレスの場合も同じですが）「動」と訳している kinesis（キーネーシス）というギリシア語は、（空間的移動や姿勢や状態の変化だけではなく）すべての変化を意味するので、「動いていなくても観察されていれば」という部分
1715 は、「観察されていれば」と言われているところで、すでに「観察される＝動かされる＝動いている」という意味なのです。ですから、最初の部分「動いていなくても」というのは、実は、正確ではなくて「動いていないように見えても」という意味に解されます。後半のトマスについては、「トマスの主張」というよりも、現代日本語の「信」と中世ラテン語の fides の意味がずれている、という事実の指摘であると思ってください。トマスが勝手
1720 に主張しているのではなくて、fides の対象は、知の対象とは異なる、という用法なのだ、ということです。つまり、何の断りも注意書きもなく、fides を現代日本語の「信」と訳すことはできない、ということ、でございます。資料もご覧下さいませ。

1725

1730

Q.0 哲学と神学について. ずっと前の質問(もしかしたら先生の別の授業かもしれません)で, 哲学は対象を自己との関係の中で考えるから, 対象は無限だと思うといった内容の質問をしました. その回答で1つの時代で見れば, そのような考え方もあると言われた気がします. 今回のレジュメを読んでそれを思い出しました. ただ哲学も対象を解明して, 1740
そこで終わりという点は違和感をおぼえました.

A.0 各人が, 哲学にどの範囲にまで及ぶ対象を委ねているか, ということ次第でしょう. 質問者にとっての哲学は, おそらく, すべての(無限の)探究領域をカバーするものと考えられているのでしょうか. それに終点(限界)があると言われるので, 異和感・違和感を感じるのだと思います. しかし, 資料で紹介した, 哲学的諸学と聖なる教え(これを単純に, 1745
哲学と神学と解すると, 問題があるのですが)の両方を, 人間の知性による営みと見なす立場では, 人間の知的活動は哲学に終わるものではなく, いわば, その先があるのです. これは信仰のあるなしで片付けられる簡単な問題ではありません. 一方では, 哲学の定義, 位置づけの問題ですが, 自分は哲学をやっているのだろうか, という反省が常に必要です. 1750
これには, 資料に示した, プラトンのきつい言葉を思い起こすとよいでしょう [Plato, *Resp.* VII, 535C5~8]. また, A.9とA.10に引用しておいた, 山内志朗先生のつぶやきも参考にしてください.

Q.1 先生の講義では, よく数学に関する話がでてきますが, 大学に進学して以来ほとんど触れていないので, なかなか理解できませんでした. ですが, せっかく触れる機会を頂いたので, 折を見て少し勉強してみたいという思いをもつことができました. 今までありがとうございます. お話, おもしろかったです. 1755

A.1 勉強してみてください. 数学史として, どのような問題があるのかを知るには, 授業でも一部, 紹介しましたが, ちょっと古いですが, 日本語で読めるものに, 以下のようなものがあります. 1760

- ・寺坂英孝編『現代数学小事典』, 講談社ブルーバックス, 昭和52年.
- ・ブルバキ/村田全・清水達雄訳『数学史』, 東京書籍, 1970年.
- ・ヘルマン・ワイル/菅原正夫・下村寅太郎・森繁雄訳『数学と自然科学の哲学』, 岩波書店, 1959年.

Q.2 アウグスティヌスは, どちらかというとな神学者だと思うのですが, 哲学者でもあると感じています. そこで, 神学と哲学はどのような関係性についてです(ママ, 「そこで, 質問は, 神学と哲学はどのような関係にあるかについてです」, あるいは, 「そこで, 質問は, 神学と哲学の関係についてです」). 哲学の1分野(ママ, 一分野)として神学が存在しているのですが. 僕は, 神学と哲学は(ほぼ)別物だと思うのですが, 赤井先生はどうですか. 1770

A.2 (質問の日本語が、文法的に崩壊している(アナコルトン)ので、推測して修復してみました)最後の部分の質問は、神学と哲学を第三者として外から見て、どう位置づけるか、という意味かと思いますが、アウグスティヌスの場合は、世間でこれまで行なわれているものはどうであれ、真の宗教と真の哲学は一致する、という立場だと思えます。ですから、質問者の立場とは違います。しかし、自分とは違うことを常に意識して、アウグスティヌスは、なぜそう考えるのだろうか、と、違いを意識しながらテキストを読むことは、頭を鍛える、大変よい訓練になります。さて、質問に戻りますが、それぞれの思索家を、第三者として外から見れば、その思索家ごとに、神学と哲学の関係はいろいろありえると思えます。アウグスティヌスの場合は、すでに述べた通りですが、トマスの場合は、区別された上で、同時に、哲学的諸学は、より上位の、聖なる教えに資する、という関係にあると思えます。私の場合は、神学といえるものをもっていないので、ないものとの関係を述べることはできませんが、かといって、能天気な理性に全幅の信頼をおいて、哲学が何でもできるという、近世的合理主義(これは、A.9に引用した、山内志朗先生のお言葉では、「近世に入っての並みの知性」と関係すると思えます)には、嫌気がさします。そういうわけで、まだ、自分とは違うことを常に意識しながら、主に、古代中世のテキストを読んで、頭を鍛えている途上にあるのですが、世の中、このような「西洋哲学史」の文献学的研究も厳密にできないような輩が、何を勘違いしているのか、「哲学」をやっているつもりになっているのが多すぎて、しかも、そういう連中に限って、A.10に引用した、山内志朗先生のつぶやきのような、謙虚さがなくて、次々と印刷物(著書、論文、翻訳)を公刊するので、迷惑です(Falsorum verba philosophorum nocent)。しかし、やがて、50年、100年経てば、本当に価値のあるものだけが認められることでしょう。(なんだか、ショーペンハウアーやニーチェのつぶやきのようになっていました)

1775
1780
1785
1790
1795 Q.3 理解できればおもしろいのですが、残念ながら幾何学についてはほぼわかりそうにありませんでした。言語の不十分さについてはわかるような気がします。ここで言われているものとは違うような気もしますが、日常生活でも自分の感情をうまく言葉にできなかったり、表現したいことがあってもちょうど良い言葉が見つからなかったりするときでも言語は不十分であると思えます。

1800 A.3 ですから、というか、にもかかわらず、あきらめるのではなく、限界まで、表現しようとする努力が必要なのですね。

1805 Q.4 [第14回の] Q.6 についてですが、確かに何かの事柄に怒ったり悲しんだりしても、時を経て笑い話にしたりすることがあります。また、本当は悲しいのに気分を変えるためにわざと笑いに変換することもあります。

A.4 一般に、「悲しい」と「泣く」、「明るく楽しい」と「笑う」という結びつきを思いつきます。問題になっているのは、この結びつきを逆にした、「悲しい」と「笑う」のほうですが、もう一方の、「明るく楽しい」と「泣く」を結びつけた発言を思い出しました。

1810 指揮者のブルーノ・ワルターが、モーツァルトを演奏する前に、オーケストラにしばしば
言っていた、と伝えられている言葉です。「泣き伏したくなるほど、明るく、明るくなけ
ればなりません.」

1815 Q.5 科学哲学・科学思想史の授業ありがとうございました。赤井先生は独特の世界観をお
持ちで、とても楽しい授業でした。しっかり時間があるので、レポートががんばりたいと思
います。楽しみにしておいてください。

A.5 はい。「独特の世界観」というのが気になりますが.

Q.6 「on ne lit pas, mais on relit」

1820 私も老人ではありますが、読んだことが無い本を今、一生懸命読んでいます。今まで、自
分には全然関係の無いと思われていたような分野について興味を持つことが出来るよう
になったのは、現実の社会から逃避して大学に入るという仕方で、自分自身の限界と可能性
を見直すことを通して、来るべき‘死の時’までに自分の所有していた物質と自己就着（マ
マ、執着？）の意識をできるだけ減らしていきたいと思っています。

1825 昔読んだ本を読み返す時間の余裕はあまりないのですが、年齢を重ね色々な経験を経て
から同じ本を読むと感動する箇所がきっと違うと思います。私は川端康成の『千羽鶴』を
中学生の時に読んだのですが、あまりよく分かりませんでした。30代で読み直したときは
感動しました。

若者たちには、受験知識のための読書では得られない感動と出会える可能性があるので、
「純文学」を読み直して欲しいと思います。

1830 「亀の甲より歳の功」と言うように、若い頃より、少しは知識が増えたという点で、老
人になるのも悪くないと思いませんか？

A.6 まず、欧文の引用に「 」を使うのはやめましょう。それから、引用したフランス語
自体は文法的には間違っていないと思いますが、私の記憶違いで、正確には、

1835 “on ne lit plus, on relit.”

（人は更に多く読むのではない。読んだものを読み直すのだ）

で、19世紀ロマン派の詩人ヴィニーの言葉のようです。

1840 最後の質問ですが、唯識的に言うと、老人になると、阿頼耶識の部分が大きくなってこま
るような気がしますが、それも使い方次第ですので、よいのかもしれませんが。

感想の部分は、若い人にも読んでいただきたいので、そのまま掲載させていただきます。
有益なコメント、ありがとうございます。

1845 Q.7 赤井先生や田中美知太郎先生のお話を聞いて、私も高校時代、通学カバンに英和辞典
を毎日突っ込んでいたら（たいして使ってもいないのに）ボロボロになってしまっていた

のを思い出しました。今度本がボロボロになってしまったときには、自信を持って「読みすぎてボロボロになった」と言えるようになりたいと感じました。

1850 双曲線幾何学や放物線幾何学（ユークリッド）、楕円幾何学というような幾何学についてのお話がありました。全く想像を絶するものでありました（ユークリッド幾何学でさえ、「直線」というものの固着的認識や「放物線」のイメージにとらわれてか、なぜ「放物線」幾何学なのに「平行」な線が引けるのか、という疑問から離れることができませんでした。．．．）。ボヤイのお話は興味深かったので、今日紹介していただいた本を探してみようと思います。

1855 この授業を通して、ことばの持つ力の大きさや複雑さ、多様さを感じ取ることができたように思います。

A.7 A.1に文献を紹介しておきましたから参考にしてください。寺坂英孝編『現代数学小事典』がおすすめです。

1860 Q.8 滑稽で笑えるということが自分をも対象とすることは理解できたのですが、憐憫も自己を対象とすることも可能なのではないのでしょうか？半年間お世話になりました。

A.8 確かに論理的には可能でしょうが、「憐憫」という日本語からして、AがBに憐憫の情をもつ、というのは、AがBをかわいそうに思うこと、だとすると、通常は、AはBより、より上位の立場にあって、余裕があるから、かわいそうに思う、ということが成り立つでしょう。そうすると、ただちに、 $A=B$ というのは、無理があるような気がしますが。

1865 Q.9 トマスの『護教大全』の例の部分は別の授業で見ましたが、個人的には「おもしろい」見方だなと思いました。しかし、この「おもしろい」は学問につながるようなものではなく、異文化に対する興味のようなものだと思います。（自分の感想に、思います、という言葉を使うのはおかしいと思いますが）

1870 A.9 そう思いますか。必ずしもそうではないかもしれませんが。最近の、山内志朗先生（慶応）のつぶやきに、こういうのがあります。

1875 中世哲学？また尋ねられた。中世のヨーロッパの知性の精髓が築いた知の巨塔。桁外れの知性の生み出した人類の知的遺産なのだが、同じくらいの知性がないと理解できない。近世に入っての並みの知性では理解できず、煩瑣にして空虚の概念の戯れと捉えたが、そんなことはない。（2015年1月24日）

Q.10 信と知を直観の能力と推論の能力（コメント p. 16）と読み替える。この時、非存在（という概念）と我ありという結論は同じことの裏表でなければならない。

1880 神を前提としない場合、大前提、小前提、結論の関係は各々、なまの直観（≒存在了解）、事象内容、非存在に対する我ありという思い、となる。（actualiät(ママ, Aktualiät), realität(ママ, Realität), 結論, という関係性）

神を前提とするならば、これらが無いまぜになって初発に提出される。仮にそれを認めるならば、信仰の有無に関わらず論理的には同じことを言わんとしている（が、語り得ない）。

1885

以上のようなことを思いついたのですが、論文にすると（専攻ではないので）後世で笑われたり怒られたりしそうなので、ひっそりとコメントに書いてあとは胸にしまっておくことにします。

A10 しまっておいたほうがよいかもしれませんね。なのに、ここに、書き出してしまっ
て申し訳ございません（私にも、もっと言葉を補って説明してくれなければ、何を言っ
ているのかわかりません）。が、これも、山内志朗先生（慶応）のつぶやきなのですが、「世
の中には自分の考えは正しいと人を押しつけて語る人がいる。私はいつも自分の考えは間
違っているかもしれないと思って、話さないようにしてきた。」（2015年1月24日）とおっ
しゃっていて、なるほどと思ってしまいました。感想を書いてくれた人と同じ気持ちでは
ないでしょうか。

1890

1895

1900

1905

1910

1915